都立図書館・学校支援シリーズ

特別支援学校での読み聞かせ

都立多摩図書館の実践から

東京都立多摩図書館

はじめに

どの子供も読書の喜びに出会ってほしい。このような考えのもと、都立多摩図書館は、平成17年度より、都立特別支援学校との連携事業を行ってきました。その一環として、学校に出かけて、子供たちに絵本の読み聞かせなどをしてきました。私たちが出会った子供たちは、幼稚部から高等部まで幅広い年齢にわたり、障害も様々です。絵本の楽しさを体中で表現する子供もいれば、表情だけではなかなかわからない子供もいます。

８年間、手探りでいろいろな絵本を読んできました。この経験をもとに、特別支援学校の子供たちが喜んだもの、読んで手応えを感じたものを選び、ここに紹介します。

この冊子では、子供たちの障害に応じて絵本を紹介しています。絵本のあらすじ、特色、読み方のこつ、実践事例を書きました。私たちに、読み聞かせの様子を伝えてくださった学校の事例も掲載しました。

子供たちは一人一人、絵本の好みも楽しみ方も異なります。ここに紹介している絵本が、ある子供に喜ばれても、別の子供にはまったく喜ばれないこともあります。初めて読み聞かせをするときには、その子供たちが、どのような絵本を喜ぶだろうかと想像して、この冊子から選んでみてください。そして手応えを感じたら、どうぞ繰り返し読んでください。子供が絵本とともに成長していく様子がわかります。

冊子作成に至るまで、たくさんの学校にお世話になりました。私たちの趣旨に理解を示し、受け入れてくださった校長先生、読書活動に信念を持って日々取り組んでいらっしゃる先生方、そして素晴らしい聞き手であった児童・生徒の皆さんへ、心から感謝いたします。

連携校のひとつであり、文部科学省の子どもの読書活動優秀実践校として表彰された都立八王子東特別支援学校から、心温まる巻頭言をいただきました。

この冊子を、特別支援学校、特別支援学級での読書活動に生かしていただければ幸いです。

東京都立多摩図書館

発刊にあたって

「さぁ、お話をはじめましょう」

平成 24 年度子どもの読書活動優秀実践校
文部科学大臣表彰受賞校
東京都立八王子東特別支援学校長　**加藤　洋一**

私たちの学校には、外の世界が見えにくい、ことばの理解が難しい、文字を読むことが難しい、本が重くて持てない、ページをめくることが難しい等と様々な困難を抱えている子供たちがいます。

でも、みんな本が大好き。お話が大好きです。

Ａさんはときどき気持ちが不安定になって、ひどく落ち着きがなくなってしまうことがあります。見え方に困難さがあるために、突然の物音や予想できない出来事に混乱してしまうのです。でも、大好きなお話が始まると、Ａさんは耳を澄ましてご機嫌な表情に・・・。「おおきなかぶ」のお話では、かぶをひっぱる「よいしょ」の掛け声に合わせて手をとんとん！と叩きます。それから、登場人物と一緒に「おーい」と声を出して呼んだり、「さあ、かぶはぬけたかな？」との問いかけに、「えーと……？」と考え込む表情になったりします。そんなとき、Ａさんはすっかり落ち着いて、楽しそうです。お話は、Ａさんの心を温かく、豊かにしてくれます。

お話を使った他の学級の授業では、こんなこともありました。悪いことしかやってこなかった泥棒三人組が、女の子と出会って優しい気持ちが芽生えたという『すてきな三にんぐみ』のお話を扱ったときのこと。先生が作詞・作曲した、緊張感のある泥棒の歌とともにお話が展開されると、子供たちは不安そうな表情になりながらも「どうなるのだろう？」と引き込まれている様子。一転して、女の子との出会いで泥棒たちの頑なな心が温かく溶けていくと、子供たちの緊張でこわばった顔つきもやわらかい表情になるのでした。そんなときは、子供たちの心だけでなく、体まで見ちがえるように変わります。お話に合わせて女の子に見立てたお人形を抱っこすると、あら不思議、過緊張でぎゅっと体を固めがちな子供も、ふんわりと優しい抱っこができるようになるのでした。

こんな風に、お話は子供たちの学校生活の中で大活躍。お話は、見る、聴く、触れる、といった様々な感覚を通じて、子供たちの感性を豊かに育くむ力を持っています。それだけでなく、読み聞かせをする時のお話を語る人が発する言葉、間の取り方、息づかいなどの一つ一つが、子供の心に直接届いていくのです！

学校の多くの子供たちが、いろいろな方々から本を読んでもらって育ってきました。本当に素晴らしく、貴重なことだと感謝しています。

この都立多摩図書館が作成した「特別支援学校での読み聞かせ」をお手にとってくださった皆さん、どうか子供たちとのお話を楽しんでください。語ってください。そしてたくさん心の交流をしてください。そうすればきっと子供たちの心は輝き、皆さんの心は温まるでしょう。きらきら輝く子供たちの心が、私たちの住む世界を温かくきらきらと輝かせる、そんな未来のために、一緒にページをめくってお話をはじめようではありませんか。

目　次

Ⅰ　特別支援学校での読み聞かせ　６つの手法 …… 4

Ⅱ　知的障害・肢体不自由の子供たちへの読み聞かせ …… 5
1　音や言葉のリズムを楽しむ絵本 …… 5
2　やりとりを楽しむ絵本 …… 10
3　繰り返しを楽しむ絵本 …… 15
4　創作物語絵本 …… 19
5　昔話絵本 …… 32
6　知識の絵本 …… 37
7　わらべ歌・手遊び …… 53
8　おはなし会のプログラム事例 …… 57

Ⅲ　聴覚障害の子供たちへの読み聞かせ …… 60
1　絵本の読み聞かせ方
2　繰り返しのある絵本
3　絵が物語る絵本
4　昔話絵本
5　知識の絵本
6　わらべ歌
7　ブックトーク

Ⅳ　視覚障害の子供たちへの読み聞かせ …… 71
1　子供たちはお話が好き
2　言葉のリズムや歌を楽しむお話
3　ユーモラスなお話
4　人の一生を描いた昔話
5　プログラムの立て方
6　子供たちに喜ばれたお話

Ⅴ　新しいメディア － マルチメディアDAISY …… 76

読むにあたって

・各絵本には、書名（シリーズ名）・著者名・出版社・ISBNを示しています。
・平成25年（2013年）2月現在購入できる絵本には、ISBNを付しています。
・聞き手の理解の難易度を★で示しています。
　★　：小学部低学年以下の年齢の児童に喜ばれるもの、障害の重い児童・生徒に喜ばれるもの
　★★：小学部高学年以上の年齢の児童・生徒に喜ばれるもの
・➡は、参照ページを表しています。
・クイズ は、クイズ形式で楽しめる絵本です。

Ⅰ　特別支援学校での読み聞かせ　６つの手法

子供の障害の程度に応じて、読み聞かせに工夫をすることができます。都立多摩図書館の実践から、特別支援学校での読み聞かせについて６つの手法を提案します。

1　寄り添って読む

障害の重い子供には、文章どおりに読むのではなく、子供の気持ちに寄り添って語りかけましょう。食べ物の絵本であれば、「おいしそうだね」「どれを食べようか」、動物の絵本であれば「犬が寝ているね」「もうおきるかな」など、１対１で呼びかけます。

2　一部分を読む

本の初めから終わりまで、全部読まなくてもよいのです。子供が興味を持つ部分だけを読むことから始めましょう。たとえば、電車の絵本であれば、一番好きな新幹線の場面だけを、仕事の絵本であれば、消防士の場面だけをじっくりと楽しみます。子供の興味が広がるにつれて、楽しめるページが増えていきます。この手法は、知識の本で特に効果があります。

3　ダイジェストで読む

文章どおりに読まれると、理解できない子供、最後まで聞くことが難しい子供には、ストーリーをかいつまんで話したり、言葉をやさしく言いかえたりして、読みましょう。ストーリーの本筋に沿って、本の持ち味を損なわないように、伝えてください。読み手は、どのように読むか事前に準備しておきます。子供の様子に応じて臨機応変に対応するとよいでしょう。

4　読んだことを体験する

実物を添えたり、読んだことを体験してみると、本への興味が深まります。

ドングリの絵本なら、実物のドングリで子供の興味をとらえ、視線を本の方へ誘ってみます。ドングリ拾いをしてみるのもよいでしょう。サンドイッチの絵本なら、同じようにサンドイッチを作って、食べてみると、本への関心が違ってきます。

小学部低学年などでは、指人形で呼びかけて、子供の笑顔を引き出してから、読書へと誘うのもよい方法です。

5　クイズをしながら読む

クイズが好きな子供たちには、クイズ形式の絵本を読むとよいでしょう。子供たちは、問いかけを集中して聞き、正解すると、とても満足します。おはなし会の場も盛り上がります。

この冊子ではクイズ形式の絵本には？クイズが付いています。

6　繰り返して読む

何よりも、同じ絵本を繰り返し読むことが大切です。毎日、同じ絵本を読んでいると、少しずつ子供の楽しみ方が変わってきます。小さな変化を大切にしましょう。

小さい頃楽しんだ絵本を大きくなってから、また読むのも実りがあります。年月がたった分だけ、絵本をより深く受け止めることができます。

Ⅱ　知的障害・肢体不自由の子供たちへの読み聞かせ

特別支援学校で読み聞かせをすると、子供たちは絵本が大好きであることを実感します。

一つのクラスにいる子供たちの障害は様々です。何を楽しみ、何に興味を持つかも一人一人違います。そこで、おはなし会にはいくつかのタイプの絵本を用意しておきます。音や言葉の響きを楽しむ子供、同じフレーズの繰り返しを楽しむ子供、おいしそうな食べ物や、かっこいい乗り物の絵に興味を示す子供、まるごとお話の世界を楽しむ子供。何冊か読むうちのどこかで、子供たちは関心を持って、喜びを表現してくれます。

特別支援学校の子供たちは、一人で本を手に取って読むこと自体が難しいこともあり、読書体験に恵まれないことも多いでしょう。身近にいる大人が、絵本を読み聞かせることで、子供はお話や本の世界が楽しく豊かであることを知ります。

子供は大好きなお話を繰り返し聞きたがります。聞くたびに、新しい喜びを見出し、新しい発見をします。大きくなったからといって、絵本を卒業しないで、大好きなお話を読み続けてあげましょう。

1　音や言葉のリズムを楽しむ絵本

子供は、意味よりも、まずリズミカルで楽しい音や言葉に反応します。リズミカルな言葉に体をゆすったり、声をあげたりすることもあります。ここに載せた絵本は、だれもが楽しめる、読書への入り口になるものです。絵本の音や言葉をきっかけに、子供は読み手と笑顔をかわし、言葉への興味、読み聞かせへの共感をはぐくんでいきます。子供たちと言葉でつながるという思いを持って、楽しんで読みましょう。

『カニツンツン』　金関寿夫 ぶん　元永定正 え

福音館書店　978-4-8340-1782-3　★

最初の場面を開くと、「カニ　ツンツン　ビイ　ツンツン　ツンツン　ツンツン」、こんな言葉が登場します。そばには赤い大きな物体が。次の場面では、「ピイヒャラ　ピイパッパ　ピイヒャラ　ツンツンツンツン」という言葉とともに緑色の物体が出てきます。ページをめくるごとに、ちょっと不思議な、韻を踏んだ言葉が繰り出されます。音の響きを楽しむ絵本です。

作者の金関寿夫さんは、自分が創った言葉と世界各地の言葉を組み合わせて楽しい絵本をつくりました。ページをめくるたびに楽しそうな言葉が出てきて、小学部低学年から高等部まで、多くの子供が喜びます。

読む側にとっては、難しい絵本です。巻末に、「カニ　ツンツン」はアイヌの人びとの聞き取りによる鳥のさえずり、「スプモーニ　トトーニ」はイタリア語など、言葉の由来が記してあるので、これらを参考に読み方を考えるとよいでしょう。

一本調子にならないように、ゆっくり読む言葉、速めに読む言葉など緩急をつけます。子供に読む前に、必ず誰かに聞いてもらいましょう。何回も読んでいる人の読み聞かせを聞くことも参考になります。

ある特別支援学校の小学部で読んだとき、途中から一人の児童が声を上げながら前に出てきました。その子は読み手と口をそろえて言葉を言おうとしました。そのうちに何人かが「ツンツン」と言い始めました。

中学部や高等部では、ストーリー絵本（創作物語絵本・昔話絵本）の合間に読むと、聞き手の気分転換にもなり、メリハリのあるおはなし会にすることができます。

読み聞かせの終盤に、赤い物体のことを「カニの絵本ですか？」と大声で聞いてきた児童がいます。ページごとに登場する幾何学的な物体が、子供たちの想像力を刺激するようです。

Ⅱ

『もけらもけら』　山下洋輔 ぶん　元永定正 え　中辻悦子 構成
福音館書店　978-4-8340-0402-1　★

まるい頭の不思議な物体が何体も現れて、「もけら　もけら　でけ　でけ」。ページをめくると、四角い頭の物体が出現して「ぱたら　ぺたら」。次のページは三角形の頭の物体が「ぴた　ごら　ぴた　ごら」。この後、「しゃばた　しゃばた」、「だぱた　どぱた　どば　どば　どば」など音楽を奏でるような言葉が一場面ごとに繰り出されます。

音の響きやリズム感を楽しみます。文を書いているのがジャズ・ピアニストの山下洋輔さんだからでしょうか。１冊が１曲の音楽となっているようにも読み取れます。一場面ずつ形の違うカラフルな物体が描かれており、この物体が言葉を発しているようにも見えます。このようなイメージを大切に、歯切れよく読んでいきます。一場面ごとの言葉が短いので、何回か同じ言葉を繰り返してもよいでしょう。最後のページの「ずばらば」に続いて、裏表紙の「だば！」も忘れずに読みます。

小学部から高等部まで楽しめます。ある特別支援学校の小学部では、読み手の声に反応したのか、しきりに声を出している児童がいました。そばにいた先生もその児童が喜んでいると教えてくれました。そのときは、丁寧に一場面ごとに繰り返して読みました。

『もこもこもこ』　たにかわしゅんたろう さく　もとながさだまさ え
文研出版　978-4-580-81395-3　★

「しーん」とした平らな地面が、「もこ」と小さく盛り上がります。「もこもこ」とだんだん大きくなると、隣りからも小さく「にょき」と出てきます。大きくなった〈もこもこ〉は〈にょきにょき〉を「もぐもぐ」と食べてしまいます。すると体の一部がふくらんで落ちてしまいます。落ちた物体は「ぷうっ」と大きく膨らみ「ぎらぎら」と輝き出します。最後は「ぱちん！」と破裂。地面は平らになって静まります。すると、また「もこ」。

「もこ」、「にょき」などの擬音語の繰り返しが楽しい絵本です。『カニツンツン』や『もけらもけら』との違いは、言葉と絵の組み合わせにより一つのストーリーが展開していることです。地面から何かが生まれて消えていく、誕生と消滅をイメージさせる絵本です。すべてが消え去った後、また地面が「もこ」と盛り上がり、再生を予感させる終わり方です。

各場面での言葉のイメージを大切に読みます。一場面の言葉が短いので、繰り返し言ってもよいでしょう。この絵本は見返しからすぐに話が始まるので、必ず表紙カバーを外して読みます。

小学部だけではなく、障害の重い中学部や高等部でも楽しめます。ある特別支援学校の中学部では、読み手に続いて「もこ」と繰り返す生徒や、一場面ごとに驚いたような顔をする生徒もいました。

『おいしいおと』　三宮麻由子 ぶん　ふくしまあきえ え
福音館書店　978-4-8340-2392-3　★

食卓に並んだたくさんの料理をいただきます。「はるまきたべよう　カコッ　ホッ　カル　カル　カル　カル　カル　あぁ　おいしい」。次はホウレンソウ。「ズック　ズック　ズック　ズック　ズック　ズックズ」。それからごはん、わかめの味噌汁、ウィンナ、かぼちゃ・・・、おいしい音をたてて食べていきます。最後はデザートを「サシュッ　スウィーン」と食べて、「ごちそうさまでした」。

食事の始めから終わりまでを〈食べている音〉で表現しています。見開きの左側に文章、右側に料理の絵があります。ホウレンソウのおひたし、ほかほかと湯気を立てているごはんなどが、やわらかいタッチで描かれています。家庭での食事の温かさが伝わってきます。

読むときは、自分が今食べているというイメージで、気負わずに読みましょう。

ある特別支援学校の小学部では、読み手に続いて「プワッ」などと言って、音を楽しんでいた児童がいました。読み聞かせた後、「おいしかったね」と、子供たちに言葉をかけた先生がいました。こ

のように食事の始まりから終わりまでを疑似体験する絵本としても楽しめます。

『でんしゃはうたう』　三宮麻由子 ぶん　みねおみつ え
福音館書店　978-4-8340-2398-5　★

男の子とお母さんが、駅のホームで待っていると、「かかっ　かかっ　すしゅーん　こっ　こっ」と、電車が入ってきました。一番前の車両に乗り込み、運転席の後ろから外を眺めます。電車は「とっ　どだっとおーん　どだっととーん　どだっととーん」と走ります。踏切の警報器が「ねん　ねん　ねん　ねん」と鳴っています。鉄橋を渡るときは「ごどん　どどっどど　ででん　だだっだだ　だだん」。次の駅に着いて「かっ　ぷしゅっ　しゅっ　しいー」と止まりました。

Ⅱ

電車が次の駅まで走っていく様子を、電車のたてる音と、運転席からの風景の絵によって見事に表現しています。

電車の音に、多くの子供が興味を持ちます。運転席からは、特急電車やモノレールなども見えてくるので、絵だけでも楽しめます。

読むのが難しい絵本です。『おいしいおと』と同様に、まず、自分が電車に乗っているイメージを持って読む練習をします。実際に電車に乗って音に耳を傾けてもよいでしょう。走る電車のリズミカルな音を意識して読みます。

「ぎぃー　ぎょぎょぎょぎょ　だだっ　だだどどん」のように、活字の大きさが違っています。小さい活字の部分は声をひそめ、大きい活字の部分は勢いよく読むなどメリハリをつけるとよいでしょう。

『コッケモーモー！』　ジュリエッド・ダラス＝コンテ 文
アリソン・バートレット 絵　たなかあきこ 訳
徳間書店　978-4-19-861450-8　★★

ある朝、オンドリは、夜が明けたことを告げようとして、「コッケモーモー！」と鳴いてしまいました。雌ウシたちに「モーモーはうしのなきごえよ」と言われ、次に「コッケガーガー！」と鳴いて、アヒルたちにおかしいと言われてしまいます。何度やっても正しく鳴けず、オンドリは悲しくなります。その晩、寝静まった頃、キツネがやってきます。目を覚ましたオンドリが、「コッケモーモー！コッケガーガー！コッケブーブー！コッケメーメー！」と鳴き声を上げると、キツネは逃げ出します。みんなが「きみってほんとにすごいなあ」とほめてくれました。うれしくなったオンドリは「コッケコッコー！」と鳴きました。

お日様を背景にオンドリが鳴いている明るい表紙が、子供の目を引きつけます。本文の絵も暖色中心の明るい色彩です。オンドリや雌ウシ、ブタ、ヒツジ、キツネなどがデフォルメして描かれていて、物語をわかりやすく伝えています。

繰り返しの鳴き声を喜ぶ子供から、オンドリの滑稽さなどストーリーを面白がる子供まで、幅広く受け入れられ、安心して読むことのできる絵本です。

読むときには、オンドリの鳴き声を少し強調して、歌うように伸び伸びとリズミカルに読むと喜ばれます。聞き手によっては、１回でやめずに何回も読むと、楽しさが膨らみ、更に興味をもってくれます。キツネが登場する場面では､｢きつねだ！｣という言葉しかないので､ゆっくり絵を見せてから、緊迫感を伝えるように読むとわかりやすいでしょう。

ストーリーが理解できなくても､最初の｢コッケモーモー！｣の一声で興味を持ちます。その後｢コッケガーガー！｣､｢コッケブーブー！｣と期待していた通りに楽しい音が続き、とても喜んでくれます。他の絵本には興味を示さずにいた子供が急に大声を立てて笑い、オンドリが鳴くたびに、体をゆすって声をあげることがありました。絵本にはオンドリの鳴き声が大きな文字で描かれているので、高等部の生徒が読み手より先に「コッケメーメー」と叫んで、得意そうにしていたこともあります。

Ⅱ

『かぞえうたのほん』　岸田衿子 作　スズキコージ え

福音館書店　978-4-8340-1043-5　★★

「すうじさがしかぞえうた」､「いーいーいーかぞえうた」､「ひのたまかぞえうた」など六つの数え歌がおさめられています。｢いーいーいーかぞえうた｣では､｢いっちゃんいじわるいーいーいー､にーちゃんにかいでにやにやにや､さんちゃんさらあらいさらさらさら｣と、ユニークで調子のよい言葉が続きます｡絵や切り絵が独特の雰囲気を醸し出しています。

数え歌はテンポよく読んでいきます。該当の絵を指さしながら読むこともできますが、絵本は見せずに、子供たちに直接語りかける方が効果的です。読み手の後に続けて子供たちに繰り返し言ってもらうなど、全員で楽しむこともできます。

夏ならば季節感を取り入れて、「ひのたまかぞえうた」や「すいぞくかんかぞえうた」だけを選んで読むとよいでしょう。

ある特別支援学校の小学部で、「すうじさがしかぞえうた」を繰り返して読んだところ、２回目に何人かの子供たちが、読み手に合わせて口を動かしはじめました。この後も何回か繰り返して楽しみました。

2 やりとりを楽しむ絵本

読み手の呼びかけや問いかけに、聞き手が答えて楽しむ絵本があります。絵本をはさんで、読み手と子供が言葉を交わすのです。言葉が出ない子供は、しぐさや笑顔で気持ちを伝えます。

子供からは、ときどき驚くような答えが返ってくることもあります。子供の想像力の豊かさを楽しみながら読んでいきましょう。

『くだもの』 平山和子 さく 福音館書店 978-4-8340-0853-1 ★

大きなまるいスイカが一つ。ページをめくると半月形に切ってお皿に載っています。「さあどうぞ。」これなら今すぐ食べられます。

次の見開きでは、左のページにモモが一つ。右側のページに、皮をむいて小さく切ったモモがお皿に盛られています。お皿には手が添えられ、「さあどうぞ。」 次はブドウ、ナシ、リンゴ、クリ、カキ、ミカン、イチゴ。最後のバナナは「ばななのかわ むけるかな？」と聞いてきて、「じょうずにむけたね。」で終わります。

果物を１種類ずつ食べられるように切ったり、皮をむいたりして、「さあどうぞ。」と差し出しています。食べ物をすすめられ、ごちそうになる、という疑似体験のできる絵本です。

絵は、果物のみずみずしさが見事に描かれ、本物のようです。手を絵本の方に差し出してくる子供もいます。大人でも何度見ても飽きることのない、魅力的な絵です。

一人一人にゆっくりと絵を見せ、指さしながら果物の名前を確認したり、食べるふりをして楽しみます。「さあどうぞ。」などを何回か繰り返してもよいでしょう。

小学部の障害の重い子供たちのクラスで読んだとき、各自の前に絵本を持っていくと、手を出して絵をさわる子。ミカンが好きなので、ミカンの絵だけに注目する子。いつもはよく眠ってしまうのだが、しっかりと目を開けて見ていた子など、皆様々に楽しんでくれました。

『まるくておいしいよ』 こにしえいこ さく
福音館書店 978-4-8340-1608-6 ★ ?クイズ

最初に、オレンジ色のマルが一つ。「これなあに。」ページをめくると「チョコレートケーキ。ほうら、まるくておいしいよ。」と、おいしそうなケーキが現れます。次は黄色いマルが八つ。ビスケットとクッキーです。その後はのりまき、レモン・オレンジ・グレープフルーツ、スイカと続きます。

最初にマルが並んだ場面を見せて、「これなあに。」と問いかけます。ページをめくると、前の場面と同じ配置で、まるい食べ物が出てきます。このやりとりの繰り返しです。出てくる食べ物はお菓子、お寿司、果物など子供が好きなものばかり。一場面には食べ物だけが描かれているのでわかりやすく、温かみのあるおいしそうな絵です。特に小学部低学年や、障害の重い子供たちのクラスで喜ばれます。

読み聞かせを始めると、問いかけに次々と答えが返ってきて、とてもにぎやかになります。最初のオレンジ色のマルを見て、しばし考え、「ミカン。」と言う児童もいます。最後のスイカは大きな緑色のマルなので、当たる子が多くなります。「当たり。」と言って、スイカの絵を見せると、大声をあげて喜び、絵本に手をのばしてきたりします。

ある特別支援学校の小学部では、先生がこの絵本を繰り返して読んだそうです。２回目以降は、子供たちが登場する食べ物を覚えていて、「ビスケット」などと答えが返ってきたとのこと。子供たちは同じ本を繰り返し読むことが好きです。読むたびに、新しい喜びや楽しみを絵本から発見していきます。

問いと答えのやりとりができない子供でも、食べ物の絵が出てくると、とても喜びます。絵本を一人一人の目の前に持っていくと手をのばしたり、絵本にかぶりついてきたりします。手を合わせて、「いただきます。」と言ってから、絵本の食べ物を手に取ろうとする子供もいました。

『きんぎょがにげた』 五味太郎 作

福音館書店　978-4-8340-0899-9　★★　クイズ

金魚鉢から赤い金魚が外に逃げ出します。逃げたところはカーテンの中。カーテンの赤い水玉の中に隠れています。今度はカーテンから逃げ出し、鉢植えの花になりすましています。ページをめくるたびに金魚は逃げ出し、どこかに隠れます。隠れるところは、キャンディーの中、果物の中、テレビの中などいろいろです。最後はたくさんの仲間の金魚といっしょになり、もう逃げ出しません。

絵の中のどこに金魚がいるのか、探して楽しむ絵本です。読み手は「こんどはどこ。」と言いながら、子供たちに探してもらいます。一人一人の前に絵本を持っていき、探せるようにします。障害が軽い子供のなかには、「テレビの中」と、すぐに回答を言う子もいます。言葉で伝えることができない子供は、金魚を指さして当ててくれます。指さした子をまねて、同じ仕草を始める子供もいます。普段感情や思いを外に表すことが少ない児童が、にこにこと絵本を見ていた、と報告をくれた学校もありました。

おはなし会では、先生たちも、「どこかな？」「ここに、いたねえ」と子供に話しかけ、場を盛り上げてくれます。

輪郭がはっきりした、明るい色彩の絵は、子供たちに理解しやすいようです。デザイン性が強い絵なので、中学部や高等部でも、他の絵本の合間に取り入れて楽しむことができます。大型絵本も出版されており、こちらを使用すると、より探しやすくなります。子供の人数が多いときには、大型絵本を活用するとよいでしょう。

大型絵本

もとの絵本を拡大して作られた絵本です。大きいので絵がはっきりし、迫力もあるので子供たちは喜びます。大勢の子供への読み聞かせに適していますが、いつでも使用してよいとはいえません。子供一人一人の前に自由に持っていくことはできませんし、少人数の場合はもとの大きさの絵本の方が適していることもあります。「お話の楽しさを伝える」という読み聞かせの本来の趣旨を踏まえて使用しましょう。

『きんぎょがにげた』は、もとの絵本の大きさは22cm、大型絵本は42cmです。

II

『いるいるだあれ』　岩合日出子 ぶん　岩合光昭 しゃしん

福音館書店　978-4-8340-2303-9　★★　クイズ

動物のシルエットの写真の下に、「からだががっしり　あたまにつの２ほん　しっぽをやさしくふっている　だあれ」と、なぞなぞが添えられています。ページをめくると、サイの親子のカラー写真。「さい」と答えが出てきます。この後もなぞなぞを解いていきます。カンガルー、ゾウ、シマウマ、ペンギン、キリン、と登場します。

自然の中で生きる動物たちのたたずまいを、暖かい視線でとらえている写真絵本。子供たちとなぞなぞを楽しみながら、読み進めます。シルエットの写真が小さめなので、一人一人の前で、その子に問いかけながら、丁寧に読んでいくといいでしょう。最後のキリンのシルエットは、他の動物も映っているので、キリンを指さして読むようにします。答えの動物の親子の写真では、「ぞう」の答えの後に「並んで散歩をしているね」などと付け加えても楽しめます。

言葉で答えを言う子、じっと絵本を見ている子、興味のある動物だけを見る子など様々です。クイズをあてることが好きな子供のいるクラスでは、その子を中心におはなし会が盛り上がります。

『やさいのおなか』　きうちかつ さく・え

福音館書店　978-4-8340-1438-9　★★　クイズ

見開きの左側に「これなあに」と、文があります。右側には野菜を真ん中から切った断面が描かれています。まるい輪が何重にもなっているモノクロの絵です。ページをめくると、左側に断面図が、今度はカラーで描かれています。右側には野菜全体の姿が描かれ、「ネギ」と回答が書いてあります。同様にレンコン、ピーマン、タケノコなどが出てきます。後半ではちょっと難しくなり、サツマイモ、トマト、キュウリ…。最後は描かれた野菜の断面が勢揃いしています。

野菜の断面図から名前を当てて楽しみます。子供はクイズが好きなので、とても喜びます。一つ当たるとうれしくて、次から次へと答え始めます。白黒のページ、鮮やかな色のページと交互に展開するので、そのたびに新鮮な喜びと驚きがあります。また、キャベツやトマトなど、思いがけない形の美しさも発見でき、中学部や高等部でも喜ばれます。

【特別支援学校から寄せられた事例】

対象は高等部図書委員７名。本が好きな生徒が多く、読み始める前から、生徒は興味がある様子でよく見ていました。１ページ目から「これなあに」と読むとすぐに答えが数人からかえってきました。最終ページまで正解を当てようとする生徒がほとんどでした。積極的に発言はない生徒も、促すと答えてくれました。やや難しい絵の方が、いろいろな意見が出て、場が盛り上がりました。最後まで全員よく絵を見ていて、集中力がありました。答えのページをめくる際に「ジャカジャカジャカジャン！」と自分から言う生徒もいて、期待感が伝わってきました。

Ⅱ

『やさい』　平山和子 さく

福音館書店　978-4-8340-0900-2　★★

最初に、「はたけでそだっただいこん。」の文と、土からダイコンを抜こうとしている絵が見開きいっぱいに出てきます。ページをめくると、「やおやさんにならびました。ふとっただいこんですよ。」と、洗ったダイコンが並んでいます。このように、畑で育っている野菜と、それらが八百屋さんに並んでいる姿が繰り返して出てきます。ダイコンの他には、キャベツ、トマト、ホウレンソウ、サツマイモ。最後のサツマイモは、女の子がヤキイモを食べている場面で終わります。

写実的に描かれた野菜が、とても新鮮に見えます。育っている姿そのものをよく見せるため、トマトが実っている場面だけは縦長になっています。読むときは本の向きに注意しましょう。サツマイモは土の中で育っている絵が描かれているので、地下茎の様子をよく見せます。一人一人の前で見せながら、ゆっくりと読みきかせるとよいでしょう。

中学部や高等部でも楽しむことができます。ある特別支援学校の中学部で読んだときには、とても静かになり、一場面読むたびに、「はい」と言う生徒がいました。生徒の中に入っている先生が、一人の生徒に、読んだ言葉を繰り返し伝えていました。内容を理解することが難しい生徒を助けている姿が印象的でした。障害の重い生徒たちの高等部のクラスでは、一人一人の前に持って行き、繰り返しゆっくりと読みました。絵本のページをめくろうとしたり、絵を指さしたりと、生徒たちはそれぞれに応じた興味を示してくれました。

『しっぽのはたらき』 川田健 ぶん　藪内正幸 え　今泉吉典 監修
福音館書店　978-4-8340-0315-4　★★　クイズ

表紙に色鮮やかな鳥が、枝にとまっている絵が描かれています。よく見ると細くて長いしっぽが右側から出てきて、枝の木の実を取ろうとしています。ページをめくると、クモザルがしっぽを伸ばしています。しっぽで果物をもぎ取っているのです。その右のページには、赤いお尻の上に短いしっぽが立っています。「なんのしっぽでしょう？」。ページをめくると、ニホンザルの上半身。しっぽを立てるのは「ぼくはつよいんだぞ」という印であることがわかります。他にも犬、イルカ、トカゲなど。様々な動物のしっぽの役割を問いと答えで紹介しています。

Ⅱ

クイズのように、しっぽから動物の名前を当てることができます。どの場面も、右側に次の動物の下半身が描かれているので、しっぽを指して問いかけをします。ページをめくると、その動物全身の絵と、しっぽがどのような働きをするのかが書いてあります。書かれている文章をそのまま読むのが難しければ、要点だけを説明してもよいでしょう。比較的年齢が高く、障害が軽い子供に向いています。動物がとても精緻に、生き生きと描かれています。

ある特別支援学校の中学部で読み聞かせをしたときには、絵本を取り出して、まず、「この絵本でクイズをします。」と言いました。「クイズ」という言葉に特に男子生徒が興味を示しました。絵本の表紙を指さして、すぐさま「おサル」と言った男子生徒は、終始積極的に名前を挙げ、「大当たり」と言うと、ガッツポーズの繰り返し。皆からも拍手され、うれしそうにしていました。

ニホンザルのページでは、具体的に「ニホンザル」と言う生徒や、「上野動物園」などと言う生徒もいて、動物に対する親しみが感じられました。前に出てきてしっぽを指さした女子生徒もいました。

犬のページでは、「犬」「オオカミ」「キツネ」「おサル」など様々な答えが出ました。発言はなくても隣の子と話し合っている様子の生徒もいます。「みんなも犬が喜ぶときにしっぽを振るのを見たことがあるでしょう？」と聞くと、腕をしっぽのように振って確認している生徒がいました。

ウシでは、「ウシ」「ウマ」の声が上がり、それまで参加していなかった女子生徒が「わかった。」と言ってきました。

カンガルーは一度で当たり。イルカは「クジラ」「シャチ」などの答えが出て、なかなか当たらず、イルカだとわかると、イルカのマネ（？）をしている男子生徒がいました。また、「ヘビ」と言って、体をくねらせヘビのまねをしている女子生徒もいました。

トカゲのしっぽを切ってもまた生えてくるという説明に、身を乗り出して聞いている生徒がいました。前に出てきて何度もキツネを指さした女子生徒は、読み終わった後、絵本を手に取って見たがりました。

このおはなし会では、多くの生徒が興味を示しました。各場面を見せるときには全員が参加できるように、生徒の前をゆっくり回りながら見せるようにしました。

3 繰り返しを楽しむ絵本

同じ文章や同じ構成の文が、１、２、１、２と繰り返される絵本です。大人には退屈に感じられても、子供は繰り返しを楽しみます。期待感を持って聞き、予想したものが出てくるとうれしくなります。安心して楽しむことができるのです。

単調にならずに、子供の気持ちに寄り添って、読んでいきましょう。

『もうおきるかな？』 まつのまさこ ぶん　やぶうちまさゆき え

福音館書店　978-4-8340-1535-5　★

最初の場面には、眠っているネコの親子。「ねこねこ　よくねているね。もうおきるかな？」。ページをめくると、２匹は目を覚まし､起き上がって伸びをします｡「あー､おきた！」

次は犬の親子が眠っています。「いぬ　いぬ　よくねているね。もうおきるかな？」ページをめくると親はあくび、子犬は伸びをして「あー、おきた！」その後はリス、クマ、ゾウと繰り返されます。

「もうおきるかな？」、ページをめくると「あー、おきた！」、この繰り返しです。文が短いので単調にならないように、子供たちに期待感を持たせるように読みます。「あー、おきた！」の後、一呼吸置き、参加者に絵をゆっくり見せるとよいでしょう。

動物の毛並まで精緻に描かれた絵は、手を触れてみたくなるほどです。写実的であるともに、その動物への愛情もにじみ出た絵です。

小学部低学年や障害の重い子供たちのクラスで喜ばれます。子供たちは動物が好きなので、一人一人の前でゆっくり見せます。特に自分の好きな動物が出てくると、興味が引かれるようです。

『たまごのあかちゃん』 かんざわとしこ ぶん　やぎゅうげんいちろう え

福音館書店　978-4-8340-1192-0　★

最初に描かれているのは３つのタマゴ。「たまごのなかで　かくれんぼしてる　あかちゃんはだあれ？　でておいでよ」との呼びかけに、ページをめくると「ぴっぴっぴっ　こんにちは　にわとりのあかちゃん　こんにちは」と、ヒヨコが３羽生まれます。次はタマゴが４つ。カメのあかちゃんたちが生まれます。その後、ヘビ、ペンギン、恐竜のあかちゃんが生まれます。最後は、生まれてきたあかちゃんたちが、鳴きながら元気よく歩いていきます。

「でておいでよ」の呼びかけと、あかちゃんの誕生が繰り返されます。はっきりとした、愛嬌のある絵で、小学部の低学年で喜ばれます。リズミカルに元気よく、これから生まれてくるあかちゃんに呼びかける気持ちで読みます。「ぴっぴっぴっ」、「きゅーうきゅーうきゅーう」など、あかちゃんの鳴き声に興味を示す子供が多いので、鳴き声はしっかりと読みます。

本文の最後のページに、タマゴからワニのあかちゃんが生まれてくる絵があります。この場面もしっかりと見せるようにします。

『くまさんくまさんなにみてるの？』

エリック＝カール え　ビル＝マーチン ぶん

偕成社　978-4-03-201330-6　★

最初の場面を開くと、見開きいっぱいに茶色いクマが現れます。「くまさんくまさん、ちゃいろいくまさん、なにみてるの？」との問いかけに、クマは「あかいとりをみているの。」と答えます。次をめくると見開きいっぱいに赤い鳥。鳥は、「きいろいあひるをみているの。」と答えます。黄色いアヒルや青いウマ、緑色のカエル、お母さんと子供たちなどが出てきます。最後の場面は、登場した動物たち全員が並んでいます。

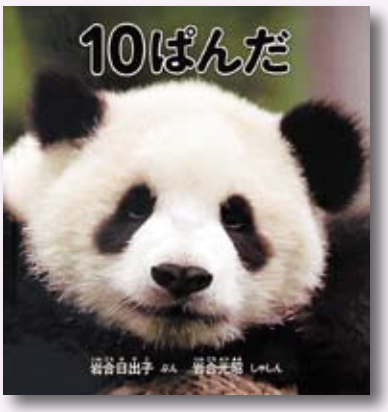
ページをめくるたびに、鮮やかな色の動物が見開きいっぱいに現れます。読み聞かせになかなか集中ができない子供も、絵に引きつけられて見つめ始めます。

一場面ずつゆっくりと絵を見せながら、読んでいきます。現実には存在しない青いウマ、紫色のネコなども、子供たちは面白がります。最後のすべての動物たちが出てくる場面は、１匹ずつ指さして読んでいくとよいでしょう。読み終わったら、クマの後ろ姿を描いた裏表紙と、前からの姿を描いた表紙をじっくりと見せます。

小学部低学年で楽しめます。絵本を読む前にわらべ歌『くまさんくまさん』（➡p 56）で遊んでから読むと、子供たちの気持ちが一層高まります。

『10ぱんだ』　岩合日出子 ぶん　岩合光昭 しゃしん

福音館書店　978-4-8340-2282-7　★



最初の場面は、１匹のパンダが木に登っている写真です。写真に添えて、「らくらく　きのぼり　１ぱんだ」と、文が書いてあります。ページをめくると、パンダは２匹になり、「のはらで　のんびり　２ぱんだ」と添えられています。３パンダ、４パンダと１匹ずつ増えていき、最後は10パンダで終わります。文は数え歌として楽しめます。

パンダの写真絵本です。かわいいパンダが増えていくことと同時に、歌も楽しめるので、子供たちはとても喜びます。一場面ずつ繰り返し言うとよいでしょう。

パンダの数が多くなり、白と黒がたくさん重なってくると、数えられなくなる子供もいます。指でさしながら「１匹、２匹、３匹、４匹、５匹・・・」と数えると理解の助けになります。数を数える楽しさも味わえる絵本です。

パンダは年齢に関係なく人気者です。ある特別支援学校の小学部では、一場面ずつゆっくり見せながら、繰り返し読みました。すると子供たちの表情が、だんだんと楽しげになってきました。途中からは、先生方も合わせて声を出し、とてもにぎやかな読み聞かせになりました。

中学部や高等部でも、他の絵本の合間に読むと喜ばれます。高等部では、絵本を見て、とろけるような笑顔を見せた生徒や、「１パンダ、２パンダ」とずっと繰り返して言っている生徒もいました。巻末にパンダのミニ知識があるので、この部分をかいつまんで説明してもよいでしょう。

『ぱんだいすき』　征矢清 ぶん　ふくしまあきえ え

福音館書店　978-4-8340-2279-7　★

パン屋さんの棚に並んだたくさんの種類のパン。いいにおい。どれもみんなおいしそう。この中から買うものを選びます。大きな食パン、クロワッサン、長いフランスパン、アンパン、サクランボのパン。トレイの上はいっぱいです。買って家に帰ったら、バスケットやお皿に移していただきます。

見るからにおいしそうな、ふっくらとしたパンが描かれています。場面ごとに、パンが１種類ずつ出てきて、「ならんだならんだ　くろわっさん。くろわっさんもかいましょう。」というフレーズが繰り返されます。多くの種類の中から選んで、トレイに乗せていくという、買い物の疑似体験もできる絵本です。最後に買ってきたパンを並べたところで、一人一人の目の前で、ゆっくりと絵本を見せていくと、多くの子供が手を伸ばしてきます。

小学部で喜ばれます。最後の場面を見せながら、「どのパンが好き？」と聞き、手を挙げてもらうと、食パンが一番人気だった学校、サクランボのパンが一番人気だった学校など様々でした。

『おひさまぽかぽか』　笠野裕一 作

福音館書店　978-4-8340-1968-1　★

お日様がぽかぽかと暖かい日、おばあちゃんは縁側にふとんを干します。そこへネコがやってきて「ふわー」とあくびをし、「ごろん！」とふとんの上に寝転がります。それを見たおばあちゃんも、「ふわー」とあくびをして「ごろん！」と寝転がります。ニワトリの親子、男の子と犬、ヤギ、ブタ、次から次へとやってきて、全員がふとんの上でぐっすりお昼寝。おばあちゃんが大きな伸びをして目を覚ますと、ネコだけが残っていました。

のんびりとした雰囲気の文章と、暖かい色彩の絵が、絵本のストーリーにぴったり合っています。次々にやってくる人物や動物が、「ふわー」「ごろん！」とふとんに寝転がるのを繰り返し、お話がだんだんと膨らんでいきます。ストーリーが理解できなくても、言葉の響きに興味を持って楽しむ子供もいます。登場人物たちが、あくびをして寝転がるところは、少し間をとって読みます。読み終わったら、表紙と裏表紙を広げ、全員が並んで歩いているのを見せます。

小学部で喜ばれます。ある特別支援学校の小学部で読んだときには、「ふあー」という言葉に興味を持った児童がいて、この言葉が出るたびに声をあげて喜んでいました。読み終わると、こちらに寄ってきて、絵本をめくり始めた児童もいました。

『これはおひさま』　谷川俊太郎 ぶん　大橋歩 え

福音館書店　★★

（復刊ドットコムより復刊　978-4-8354-4822-0）

最初の見開きに、大きな赤いマルが出てきます。その右側には「これはおひさま」とあります。ページをめくると、太い緑色の４本の線が描かれ、「これはおひさまのしたの　むぎばたけ」と書いてあります。小麦、小麦粉、パンと、ページをめくるたびに登場するものや人物が、前に出てきたものと関連付けられて、文の一番下に加えられていきます。最後は再び大きな赤いマル、つまり「おひさま」で終わりますが、お日様を説明する言葉はとても長くなっています。

素朴で大胆な絵とともに、新しい言葉が付け加えられ、長くなっていく文を楽しみます。「おひさま」で始まり、「おひさま」で終わる展開には、生命の営みへの賛美が込められています。

障害の軽い子供や、中学部・高等部に向いています。しっかりと発音し、リズム感よく読みます。ストーリーや言葉がわからなくても、絵だけを楽しむ子供もいます。

ある特別支援学校の小学部で読んだときは、「言葉がだんだん長くなるのが楽しかった。」という感想を言ってきた児童がいました。高等部では、一場面を読むたびに笑ったり、体をゆらしたり、口を鳴らしたりする生徒がいました。

4 創作物語絵本

長く読み継がれてきた絵本には、子供が喜ぶお話がたっぷりと詰まっています。このような絵本は、今も子供に十分な満足感を与えます。読んでいる間、子供たちの様子は様々です。絵本の方を見ていないようでも、実はお話をしっかり聞いている子。お話のある場面に目を光らす子。

絵本の持っている力を信じて、お話のイメージを描きながら、ゆっくりと読んでいきましょう。

『しろくまちゃんのほっとけーき』 わかやまけん 作

こぐま社　978-4-7721-0031-1　★

小さなしろくまちゃんが、お母さんとホットケーキをつくります。最初に料理の道具を準備します。次に材料をよく混ぜて、生地をつくります。フライパンで生地を焼くと、ほかほかのホットケーキのできあがり。しろくまちゃんは、友だちのこぐまちゃんといっしょに食べます。食べ終わったら２人でお皿を洗って後片付けをします。

料理を自分でつくる楽しさと食べる楽しさの２つを味わえる絵本です。登場するのは、しろくまちゃん、お母さん、こぐまちゃんの３人だけなのでわかりやすく、はっきりとした絵も親しみが持てます。

標題紙の左側にしろくまちゃんが登場し、「わたし　ほっとけーき　つくるのよ」と言っています。ここを忘れずに読みます。ホットケーキが焼けていく場面は、見開きにフライパンがいくつも並び、１コマずつだんだんと焼きあがっていく様子が描かれています。それぞれに「ぽたあん」「どろどろ」「ぴちぴちぴち」と音がついているので、絵を一つ一つ指さしながら読むと、理解を助けます。

絵本を読み聞かせた後に、実際にホットケーキをつくってみる方法もあります。実体験が加わることで読書体験がさらに深まるでしょう。

『サンドイッチサンドイッチ』 小西英子 さく

福音館書店　978-4-8340-2375-6　★

「サンドイッチ　サンドイッチ　さあつくろう」の呼びかけに、レタス、トマト、ハム、チーズ・・・いろいろな材料が集まります。ふわふわパンにバターを塗って、次にレタスを乗せます。それからトマト、チーズ、ハム、キュウリ、タマゴ、マヨネーズと順々に載せ、最後にもう１枚のパンではさみます。おいしそうなサンドイッチのできあがりです。

一つ一つの材料が温かみのある色彩で描かれています。食パンのやわらかさ、トマトの新鮮さなど、

食材のおいしさが伝わってきます。左側のページは文と材料の絵、右側のページはパンに材料を乗せている絵、という構成です。一つの材料が一場面いっぱいに描かれているので、子供たちはとても引きつけられます。読んでいる途中に絵本の方に手をのばしてくる子供もいます。

一場面がワンフレーズの短い文です。絵をしっかりと見せながら、ゆっくりはっきりと読みます。繰り返して読んでもよいでしょう。最初の「サンドイッチ　サンドイッチ」のところをテンポよく読むと、子供たちは言葉のリズムに引きつけられて、絵本を見つめ始めます。最後のサンドイッチがお皿に盛られている場面を、一人一人の前に見せてまわると、絵本に手をのばし、食べる仕草をする子供もいます。

この絵本は子供たちとのやりとりを楽しむこともできます。ある特別支援学校の中学部でのこと。「サンドイッチ　サンドイッチ　ふわふわぱんになにのせる？」と読むと、すかさず「ジャム」と言う生徒がいました。その後、材料が出るたびに、「(この材料は)好き」と声がかかりました。サンドイッチができあがると、「おいしそう」との声が。このときは、本文を読む間に「トマトが好きな人は？」などと生徒との対話を少しずつ挟んでみました。

この絵本も、実際にサンドイッチを作ってみることができます。

Ⅱ

【特別支援学校から寄せられた事例】

対象は中学部1年重度・重複学級の生徒6名。絵本の絵を注視することが苦手な生徒が多くいます。動きのあるパネルシアターは短い作品を楽しむことができるので、パネルシアターと組み合わせてみました。

パネルシアター「どんな物ができるかナ？」(『つくってうたってあそべるパネルシアター』 後藤紀子著 アイ企画) のチーズバーガーを作るところだけを演じ、その後絵本の読み聞かせを行いました。読む際は、文章のリズムが生きるよう気をつけました。また、サンドイッチをつくる動きが感じられるよう、左ページに描かれた材料を手に取り、右ページのパンに載せるようなジェスチャーを加えながら読んでみました。

生徒たちは集中して絵を見ることができました。絵本のシンプルな構成とわかりやすい絵に、パネルシアターの助けが加わり、より生徒の興味が引き出されたのではないかと考えます。

『しゅっぱつしんこう！』 山本忠敬 さく

福音館書店　978-4-8340-0086-3　★

おかあさんとみよちゃんは、大きな駅で特急列車に乗ります。列車は鉄橋を渡り、山の麓の駅に着きます。そこで急行列車に乗り換えます。山の中の駅で、普通列車に乗り換えます。列車は暗いトンネルを抜け、山奥の小さい駅に着きました。２人が駅に降りると、おじいさんと友だちが迎えにきてくれていました。

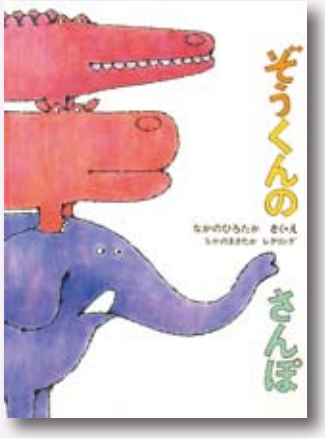
列車とその周りの駅や風景が、はっきりした色使いで描かれています。写実的な列車は、しっかりとした輪郭線で縁取られ、力強さが伝わってきます。最初の刊行（1984年）から30年近く経ち、列車の形は古く、駅の改札も今とは変わっていますが、子供たちは列車が走っていく様子を楽しんで

見ています。車内やみよちゃんたちは描かれず、走っている列車の姿だけで、ストーリーが進みます。このような絵が、子供たちが普段よく見る光景と重なり、喜ばれるのかもしれません。背を伸ばして、絵を食い入るように見る子供もいます。

各列車が出発するたびに、「しゅっぱつしんこう！」と掛け声が入ります。この部分は元気よく読みます。読み手と一緒に「しゅっぱつしんこう」と声を出す子供や、ストーリーそのものには集中できなくても、この言葉に興味を示して顔を上げる子供もいます。

表紙と裏表紙の絵がつながっています。みよちゃんが乗った３台の列車が並んでいるので、読み終わった後は開いてじっくりと見せてあげるとよいでしょう。

『ぞうくんのさんぽ』　なかのひろたか さく・え
なかのまさたか レタリング　福音館書店　978-4-8340-0515-8　★



天気のいい日、ぞうくんは散歩に出かけると、かばくんに会います。いっしょに行こうと言うと、かばくんは、背中に乗せてくれれば行くと言います。ぞうくんはかばくんを乗せて行きます。続いて、わにくん、かめくんを乗せると、ひっくり返って池の中に落ちてしまいます。みんなは水浴びをして遊びます。

簡単なストーリーですが、登場する動物たちの会話で話が進んでいきます。そのため、誰が何を言ったのかわかるように読む必要があります。しゃべっている動物を指さしながら読んでもよいでしょう。

子供たちは、ぞうくんが皆を次々に背負っていくところや、全員が池に落ちるところを喜びます。ぞうくんがバランスを崩してひっくり返り、池に落ちる場面がクライマックスです。間合いを入れて子供たちに印象が残るように読みます。

水浴びが出てくるので夏に読むとよい絵本です。大型絵本で読むと、なかなか迫力があり、喜ばれます。

小学部で楽しめる絵本です。ある特別支援学校でのおはなし会の当日、担当の先生から、この絵本が大好きな子がいるので、追加で読んでほしいと言われました。学校にある絵本を借りて読むと、その児童は、各ページの会話を繰り返し声に出し、楽しんでいました。

『ちいさなねこ』　石井桃子 さく　横内襄 え
福音館書店　978-4-8340-0087-0　★

小さなネコが、一人で外に出かけます。子供につかまりそうになったり、車にひかれそうになったりして走っていくと、大きな犬に追いかけられます。木の上に逃げて鳴いていると、お母さんネコがかけつけてきます。お母さんは犬を追い払い、わが子を口にくわえて家に帰ります。小さなネコは家でお母さんにおっぱいをもらいます。

主人公が冒険に出かけて危機を乗り越えて帰ってくる、子供向けの物語の定番ストーリーです。小さなネコの動作も、「にわにおりた。」、「『にゃお！にゃお！』とないた。」など、具体的な表現で書かれているので、わかりやすく、物語の世界への第一歩に最適な絵本です。起承転結をよく踏まえて読んでいきます。

動物の動きや表情をよくとらえた写実的な絵で、小学部から高等部まで楽しめます。犬に追いかけられ、木に登って逃げたところなど、臨場感のある話の展開に興味を持ち、真剣な表情で絵本を見つめる子供もいます。ある特別支援学校の高等部では、読み終わると「よかったねえ。」と一言つぶやいた生徒がいました。

ネコや犬などの身近な動物、自動車など、親しみやすいものが登場するので、これらに興味を示す子供もいます。

『ちびゴリラのちびちび』 ルース・ボーンスタイン さく　いわたみみ やく

ほるぷ出版　978-4-593-50077-2　★

小さなゴリラのちびちびのことを、お母さんも、お父さんも、おばあさんも、おじいさんも大好きです。森の動物たちもみんなちびちびが大好きで、遊んであげます。ちびちびがどんどん大きくなって、立派なゴリラになると、森の動物たちが「おたんじょうびおめでとう　ちびちびくん！」と歌ってくれます。

ちびちびの周りには、家族や仲間がいて、みんなが大切に見守ってくれています。ちびちびの幸せな様子や暖かい雰囲気を大切にして読んでいきます。

一場面ごとに動物が一種類ずつ登場するので、絵をじっくり見せます。大型絵本を使用すると、見開きいっぱいに描かれた赤いヘビや大きく成長したちびちびの場面は特に迫力があり、この場面で表情を変える子供もいます。

ある特別支援学校の小学部の児童は、この絵本に非常に興味を持ち、読み終わって別の絵本を読んでいる最中も、絵本を手に取ろうと、前に出てきました。小学部で喜ばれる絵本で、ストーリーは理解できなくても、次々に出てくる動物に興味を持ち、「ヘビ嫌い」、「小さいゴリラ」などと言う児童もいました。

『かばくん』 岸田衿子 さく　中谷千代子 え

福音館書店　978-4-8340-0081-8　★

動物園に朝がきました。カメの子を連れた男の子が、野菜を持ってきて、カバに呼びかけます。大きいカバと小さいカバが、水の中から上がると、子供たちが驚きます。食事になると、大きな口をあけて、キャベツを丸ごと食べてしまいます。夜になり、親子のカバは眠ります。

動物園のカバの一日を描いた絵本。文章は「どうぶつえんにあさがきた　いちばんはやおきはだーれ　いちばんねぼすけはだーれ」と詩のようにつづられています。大きくゆったりとしたカバをイメージして、ゆっくりと歌うように読みます。子供たちはカバが大きな口を開けてキャベツを丸のみするところを喜ぶので、この場面は特にゆっくり間合いを持たせて読みます。表紙と裏表紙を広げると、大きなカバが現れるので、読み終わったらじっくりと見せます。

素朴な暖かい絵が、お話と合っています。朝はグリーン、夕方になると夕焼けのような色、夜は紺色と、一日の時間の流れも背景の色から感じ取ることができます。

『はらぺこあおむし』　エリック＝カール さく　もりひさし やく

偕成社　978-4-03-328010-3　★

葉っぱの上の小さなタマゴからアオムシが生まれます。おなかがぺこぺこのアオムシは、月曜日にリンゴを一つ、火曜日にナシを二つ、水曜日にスモモを三つ、木曜日にイチゴを四つ、金曜日にオレンジを五つ食べ、土曜日には食べ過ぎて、おなかが痛くなります。日曜日に葉っぱを食べると治りました。アオムシは大きく育ち、やがてサナギになって何日も眠り、きれいなチョウになりました。

色彩の美しい絵本。子供たちはその豊かな色彩に目を見張ります。アオムシが食べた食べ物には、実際にまるい穴が開けられ、そこからアオムシが顔を出しています。このような仕掛けが、ストーリーへの理解を助けます。後半には大きくなったアオムシやサナギが見開きいっぱいに描かれ、子供たちを驚かせます。脱皮したチョウの美しい姿が、クライマックスを盛り上げます。

アオムシが食べ物を食べていくところは、「かようび、なしを一つ、二つ、二つたべました。」のように、ゆっくり指さして、一つ一つ数えながら読んでも楽しめるでしょう。

生命が成長していく美しさや、絵そのものの美しさを味わえるので、中学部や高等部でも喜ばれるでしょう。

『ぐりとぐら』　なかがわりえこ さく　おおむらゆりこ え

福音館書店　978-4-8340-0082-5　★

野ネズミのぐりとぐらは、森でとても大きなタマゴを見つけ、カステラをつくることにします。家から鍋や材料を運んできて、かまどを作り、火にかけます。おいしそうな匂いに動物たちが集まってきます。鍋のふたを開けると、大きくおいしそうなカステラが顔を出し、動物たちはみんなで分け合って食べます。2匹は残ったタマゴの殻で、車をつくります。

最初の刊行（1963年）から半世紀、子供たちに読み継がれてきた絵本です。動物たちの絵や語り口の楽しさが魅力です。その雰囲気を存分に伝えながら読みます。「ぼくらのなまえは　ぐりとぐら」の歌のところは、子供たちの集中が高まります。自分なりの節をつけて楽しく読みます。人手があれば、歌の部分はぐりとぐらのように、２人で読むと効果的です。子供たちは、鍋の蓋を開けて大きなカステラが出てくる場面にも引きつけられます。この部分は、ゆっくり読み、絵をじっくりと見せるとよいでしょう。

大型絵本を使うと、自分たちがぐりとぐらになったように楽しめます。鍋から顔を出したカステラをつまむ子供もいます。

小学部はもちろん、中学部でも喜ばれます。絵本を出すと、「知ってる。」との声がよく上がります。ある特別支援学校の中学部では、「これから、なつかしい絵本を読みます。」と言って絵本を出しました。すると、「知ってる。」と言う生徒がいました。その生徒は終りまでよく聞いてくれました。最後に「さあ、このからで、ぐりとぐらはなにをつくったとおもいますか？」と読むと、お話の顛末を知っていて、即座に「車」と答えた生徒がいました。好きなおはなしは何度聞いても楽しいのでしょう。

また、ある特別支援学校では、小学部５年生から６年生にかけて、同じ児童に３，４か月に１回、『ぐりとぐら』のシリーズを読んでいきました。最初の読み聞かせは、外部からやってきた初めて見る人が不安でもあったのか、どの程度受け入れられたのかわかりませんでした。３回目のときに、絵本を取り出し、「今日はこれを読もうね。」と言うと、微笑む児童がいました。読み終わってからも、多くの児童がよく聞いてくれたという感触を得ました。児童たちは、この人がくると、ぐりとぐらの楽しい本を読んでくれると覚えていたのでしょうか。子供たちに長い年月支持されてきた絵本の力を感じる体験となりました。

Ⅱ

『どろんこハリー』

ジーン・ジオン ぶん　マーガレット・ブロイ・グレアム え
わたなべしげお やく　福音館書店　978-4-8340-0020-7　★★

ハリーは、黒いぶちのある白い犬です。お風呂が大嫌いで、お風呂にお湯を入れる音を聞くと、ブラシを裏庭に埋め、外へ逃げ出します。泥遊びや鬼ごっこをして汚れ、白いぶちのある黒い犬になってしまいます。家に帰ると、だれもハリーだとわかりません。ハリーは埋めたブラシを掘り出して口にくわえ、お風呂に飛び込み、洗ってもらいます。すると元どおり、黒いぶちのある白い犬になります。

家から外に飛び出し、冒険をして困った羽目に陥るけれども、最後はめでたしめでたしで終わるお話。外で遊んで泥だらけになるハリーは、子供そのものです。絵も親しみやすく、遠くからもよく見えます。ハリーが外で遊びまわっているところは、どこにいるのかわかりにくい場面もあるので、指さして読むとよいでしょう。黒いぶちのある白い犬が、白いぶちのある黒い犬になったり、お風呂嫌いのハリーがお風呂に入りたがるなど、逆転のおもしろさがあります。かわいい犬の楽しげな絵に興味を持つ子供もいます。小学部で喜ばれます。

『しょうぼうじどうしゃじぷた』 渡辺茂男 さく　山本忠敬 え
福音館書店　978-4-8340-0060-3　★★

じぷたはジープを改造した小さな消防車です。同じ消防署にいるはしご車と高圧車、救急車は大きな火事があれば大活躍。3台は、じぷたのことをばかにしています。あるとき、山小屋が火事になります。じぷたは狭くて険しい山道を登っていき、火事を消します。その活躍ぶりが次の日の新聞に載って、子供たちの人気者になります。

最初の刊行（1963年）から半世紀、子供たちに読み継がれている人気の絵本。小さくても働き者のじぷたに子供は共感します。簡潔な文章なので、歯切れよく読んでいきます。消防車が並んでいる場面や消火活動の場面は迫力があり、子供が興味を持つので、ゆっくり見せるようにします。小さな消防車が大きい消防車に劣らない活躍をする話なので、小学部にお勧めです。ストーリーが理解できなくても、乗り物が好きな子は、絵を見て楽しむことができます。

『ねずみくんのチョッキ』 なかえよしを 作　上野紀子 絵
ポプラ社　978-4-591-00465-4　★★

ねずみくんはお母さんに赤いチョッキを編んでもらいました。ねずみくんにぴったりです。アヒルが「ちょっときせてよ」と借りて着ます。それを見たサルがアヒルに、「ちょっときせてよ」と言って着ます。チョッキは次々と動物たちに着られ、少しずつ伸びていきます。ゾウが着ているのを見て、ねずみくんはびっくり。伸びきったチョッキを着てがっくりして帰っていきます。

チョッキを着るのがだんだんと大きい動物になり、この後どうなるのかと期待感が持てる展開です。チョッキを無理やり着ている動物たちの表情が楽しめます。「いいチョッキだね　ちょっときせてよ」「うん」「すこしきついが　にあうかな？」という動物たちの会話の繰り返しだけで話が進むので、しっかり間合いをとって読みます。モノクロの絵の中に赤いチョッキが効果的に描かれています。

標題紙のタイトルに赤いチョッキがかかっています。また、奥付の上には、ゾウがチョッキの真ん中にねずみくんを座らせ、鼻のブランコで遊んでいる絵があります。これらを忘れずに見せます。ストーリーそのもののおかしさまでは理解できなくても、同じ会話が繰り返されていることや、ユーモラスな動物の絵を楽しむことができます。

しゃれた感じの絵なので、中学部や高等部でも楽しめます。起承転結のあるストーリー絵本の合間に読むとよいでしょう。絵が小さいので少人数向きです。

『ざっくん！ショベルカー』　竹下文子 作　鈴木まもる 絵
偕成社　978-4-03-221190-0　★★

小屋に大きさの違う３台のショベルカーが並んでいます。月曜日に仕事に出かけるのは一番小さな１号。公園で木を植える穴を掘ります。火曜日は町なかの狭い道で水道工事。水曜日は少し大きい２号が､山でがけ崩れを防ぐ工事をします。木曜日、材木を積み上げたり、川で泥をすくう、仲間のショベルカーと出会います。金曜日は古い倉庫を取り壊します。土曜日は一番大きい３号の出番。駅前で仲間たちとビルを建てる仕事をします。日曜日は、みんな一日のんびりします。

Ⅱ

働くショベルカーの一週間を描いた絵本。子供たちは、町でも山でもどこでも働けるショベルカーに興味を持ち、感動します。工事の大きさによって違うショベルカーが出ていくことにも驚きます。輪郭がくっきりと描かれ、はっきりした色合いの絵は力強いショベルカーにぴったり合っています。簡潔な文章を歯切れよく読んでいきます。ショベルカーが働くときの音「ざっくん　ざっくん！」は特にしっかりと読みます。裏表紙にショベルカーの仕組みが描かれているので、そこを見せて各部の名前を一つ一つ楽しむのもよいでしょう。

『ぼくのくれよん』　長新太 おはなし・え
講談社　978-4-06-131891-5　★★

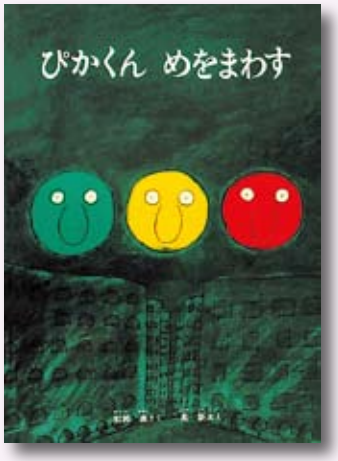
ゾウが大きな青いクレヨンでびゅーびゅー描くと、カエルが池だと思って飛び込みます。赤いクレヨンで描くと、動物たちは火事だと思って逃げ出します。黄色で描くと、大きなバナナだと思ってみんなが食べようとします。ゾウはライオンに怒られてしまいます。でも、ゾウはまだまだ描き足りなくてクレヨンを持って駆け出していきます。

絵本からはみ出す大きなクレヨンの絵、見事な起承転結。とても短い話のなかに作者の創造性が如何なく発揮されています。

最初の場面には、普通の大きさに見えるクレヨンが出てきます。それがごろごろころがり、ゾウの大きなクレヨンだとわかるところで、子供たちはまず驚きます。ゾウが鼻でびゅーびゅー描く大きな絵で更に驚きます。ナンセンスな世界を理解するのは難しくても、縦横無尽なゾウの姿や豊かな色彩を楽しむことができます。

『ぴかくんめをまわす』　松居直 さく　長新太 え

福音館書店　978-4-8340-0088-7　★★



朝になりました。信号機のぴかくんは、仕事を開始します。あお・き・あか・あお・き・あか、と規則正しく信号を送ります。人も車も信号を守ります。ところが、あまりの忙しさにぴかくんは目をまわし、交差点は大混乱に。壊れたところを直してもらうと、ぴかくんはもとどおりに動き出します。人も車も信号に従って、まっすぐ家に帰ります。

人や車であふれる都会で奮闘する信号機のお話です。擬人化されて目を開いたり、目を回したりする信号機、交差点を行きかう数多くの人や車がユーモラスに描かれています。一生懸命働くぴかくんを子供たちは応援します。場面の中で今、信号機が何色なのか、指さしながら読むと、子供たちの理解を助けます。

また、「あおです。すすめ！」「みんながぴかくんのしんごうをよくまもれば、ひともくるまも、さっさととおれます。」という文章もあり、身近な生活について学ぶこともできます。

『しんせつなともだち』　方軼羣 作　君島久子 訳　村山知義 画

福音館書店　978-4-8340-0132-7　★★

雪が降り積もり、食べ物を探しに出かけた子ウサギは、カブを二つ見つけます。一つは食べ、もう一つは食べ物がないだろうと思い、ロバの家に置いていきます。サツマイモを見つけて家に帰ってきたロバは、イモを食べて、カブを子ヤギに届けます。子ヤギは子ジカに、子ジカは子ウサギにカブを届けます。子ウサギは目を覚ますと、友だちがカブを持ってきてくれたとわかります。

動物が食べ物を持って家に帰ってくると、カブが一つ置いてある。これを友だちにあげよう、という同じエピソードが繰り返され、心が温まるお話が進んでいきます。絵も素朴で温かみがあり、動物たちや食べ物がはっきり描かれています。真っ白な外の世界と、生活感のある家の中のコントラストが美しく、お話の世界を引き立てます。それぞれの動物の家の中の様子を楽しむこともできます。各エピソードがパターン化され、読みやすい文です。流れに沿って自然に読めばよいでしょう。カブがそれぞれの家の中に置かれているところは、子供たちにしっかりと見せるようにします。

『のろまなローラー』　小出正吾 さく　山本忠敬 え
福音館書店　978-4-8340-0089-4　★★

ローラーが、重い車をごろごろ転がし、道を平らにしています。トラックや自動車が、のろまなローラーをばかにして、追い越していきます。ローラーがでこぼこ道を登っていくと、追い越していった車たちがパンクしています。ローラーはみんなを励まし、先へ行きます。修理を終えた車たちは追いつくと、ローラーに謝りお礼を言っていきます。山の上まで来たローラーは、後戻りしながらゆっくり帰っていきます。

半世紀近く子供たちに親しまれている絵本。ゆっくりとマイペースで進むローラーと、３台の車とのやりとりを楽しみます。まわりからばかにされながらも、立派な仕事をし、お礼を言われるローラーに子供たちは感情移入していきます。少し擬人化された車の力強さが伝わってくる絵です。ローラーの動作の部分はゆっくり読むと、お話の雰囲気がよく出ます。車好きの子供に喜ばれる絵本です。また、各場面に出てくる道路標識も、今いる場所がどこなのか想像できて楽しめます。

『おふろだいすき』　松岡享子 作　林明子 絵
福音館書店　978-4-8340-0873-9　★★

「ぼく」はお風呂が大好き。おもちゃのアヒルとお風呂に入ると、湯船の底から大きなカメが現れます。ペンギン、オットセイ、カバもやってきます。「ぼく」がカバの体を石鹸で洗ってあげると、クジラがシャワーをかけてくれました。みんなでお湯に入り、50まで数えると、お母さんがやってきます。動物はいなくなり、「ぼく」はお母さんの広げたタオルに飛び込んでいきます。

子供がお風呂に入って出てくるまでを、空想豊かに展開しています。水に住む動物たちと石鹸やシャボン玉で遊んだり、体の洗いっこをするのは、まさに子供時代のお風呂の楽しみです。絵は全体的に黄色っぽく、温かさが伝わってきます。

標題紙に主人公が服を脱いでいる絵があります。お話はここから始まっているので、しっかり見せます。読み終わったら表紙と裏表紙を広げて見せます。文章が長いので、子供の障害に応じてわかりやすく直して読んでもよいでしょう。例えば、本文では湯加減をみるところは、おもちゃと会話をしています。そのやりとりを理解することが難しければ、「湯加減は熱くもないし、ぬるくもないし、ちょうどいい。」というようにストレートに伝えてもよいでしょう。ただし、話の流れや持ち味は損なわないように気をつけます。

「ぼく、おふろだいすき。きみも、おふろがすきですか？」との最後の問いかけに、思わず「好き」

と答える子供もいます。主人公は湯加減をみて、体を洗ってからお湯に入り、腕、肩、胸、おなかと順序だてて洗っていきます。入浴という日常生活の一コマを確認することもできる絵本です。小学部で読むとよいでしょう。

『くまのコールテンくん』 ドン＝フリーマン さく　まつおかきょうこ やく
偕成社　978-4-03-202190-5　★★

ぬいぐるみのクマのコールテンくんは、デパートのおもちゃ売り場にいます。ある日、女の子がやってきて、コールテンくんを欲しがりますが、お母さんは、ズボンのつり紐のボタンが取れていると言って、２人は行ってしまいます。その夜、コールテンくんは、ボタンを探しにデパートを探検します。けれども警備員に見つかり、元の場所に戻されます。次の朝、昨日の女の子がやってきて、コールテンくんを家に連れて帰り、２人は友だちになります。

コールテンくんと女の子の心の交流が伝わってくるお話です。シンプルで温かみのある絵は安心感があります。コールテンくんの表情の変化もかわいらしく、話の展開にぴったりと合っています。夜、コールテンくんがデパートの中を冒険に出かけるところでは、エスカレーターを山と思って登っていく場面があります。このような主人公の内面まで理解することが難しい場合には、エスカレーターを登る、という事実のみを伝えてもよいでしょう。

『こすずめのぼうけん』 ルース・エインズワース 作　石井桃子 訳
堀内誠一 画　福音館書店　978-4-8340-0526-4　★★

ある日、子スズメはお母さんから飛び方を教わると、一人で飛んでいきます。疲れてきたので、巣で休ませてくださいとカラスに頼むと、カラスは「かあ、かあ、かあ」と言えるかと聞きます。子スズメが「ちゅん、ちゅん、ちゅん」としか言えないと答えると、カラスは仲間でないと断ります。他の鳥にも断られ、地面を歩いていると、お母さんが迎えに来ます。子スズメはおぶさって巣に帰り、お母さんの翼の下で眠ります。

一人で飛び立った子スズメが無事お母さんのもとへ帰っていくお話です。他の鳥との「おまえさん、くう、くう、くうっていえますか？」「いいえ、ぼく、ちゅん、ちゅん、ちゅんってっきりいえないんです」「じゃ、なかへいれることはできませんねえ。おまえさん、わたしのなかまじゃないからねえ」

のやりとりで、お話を盛り上げていきます。やわらかいタッチで、子スズメの愛らしさが伝わってくる絵は、子供たちを引きつけます。わかりやすい文章ですが、長いので、子供の障害に応じて読み方を考えてもよいでしょう。自然界の素晴らしさが伝わってくる絵本なので、中学部や高等部でも楽しめます。

『せんたくかあちゃん』　さとうわきこ さく・え
福音館書店　978-4-8340-0897-5　★★

洗濯の大好きなかあちゃんがいました。家中の着物や道具、ネコ、犬、子供まで洗い、木から木へ縄を張ってみんな干します。空から落ちてきたかみなりさまも洗ってしまい、目鼻が消えてしまいます。子供たちがクレヨンで描いてあげると、かみなりさまはすっかりいい男に。大喜びで空に帰っていきます。次の朝、たくさんのかみなりさまが空から落ちてきて、「せんたくしてくれえ」「いいおとこにしてくれえ」とかあちゃんに頼みます。

元気なかあちゃんの活躍が生き生きと描かれています。絵も動きがあり、親しみやすいです。洗った台所道具や子供、ネズミ、時計、ソーセージなどすべてが干されている場面、かみなりさまが大勢落ちてきた場面は壮観です。子供たちによく見えるように、ゆっくり見せます。標題紙からお話は始まるので、忘れずに読みます。全体的に元気よく読み、かあちゃんのセリフは特に歯切れよく読みます。絵が細かいので、少人数で読むとよい絵本です。

『すてきな三にんぐみ』　トミー＝アンゲラー さく　いまえよしとも やく
偕成社　978-4-03-327020-3　★★

黒マントに黒い帽子の泥棒３人組。夜になると、馬車を止め、乗客の金銀、宝石を奪い、山の隠れ家に運びます。ある晩止めた馬車に乗っていたのは、小さな女の子。女の子に隠れ家の宝をどうするの？と聞かれ、３人は孤児を集め、お城を買います。ここに住む子供たちは赤い帽子に赤マント。子供は増えて村になり、素敵な３人組を忘れないために、３つの高い塔を建てます。

主人公が恐い泥棒であること、この悪者たちが最後は子供たちを助ける、というお話に、意外な面白さがあります。闇夜を連想させる青色を背景に、黒いシルエットの３人組が印象的です。「あらわ

れでたのは、くろマントに、くろいぼうしのさんにんぐみ。」リズム感ある文が、ストーリー展開によく合っています。

文の持ち味をよく生かして、歯切れよく読んでいきます。小学部から高等部まで、幅広く喜ばれますが、絵がデザイン的なので、理解することが難しい場合もあります。お話に沿いながら、絵を指さしていくとよいでしょう。

青と黒を基調に、赤いまさかりや赤い帽子など、色が効果的に使われています。ストーリーは理解できなくても、絵の楽しさに引きつけられる子供もいます。

『よるのねこ』 ダーロフ・イプカー 文と絵　光吉夏弥 訳
大日本図書　978-4-477-02003-7　★★

夜、リーさんがネコを外に出してやると、ネコは探検にでかけます。ネコは夜でもよく見える目を持っています。鳥小屋でネズミをねらい、牧場を抜けて畑の中へ。森を抜け、広い道路に沿って町に行きます。町では仲間のネコたちが待っています。夜が明けるとネコは仲間にさよならを言って、家へ帰り、肘掛け椅子の上で眠ります。

ネコの特徴や習性を生かしたストーリーです。立ったまま眠るウマ、夜に出歩く森の動物たちなど、他の生き物の特性もわかります。絵が大変工夫されており、人間の目で見た暗い夜の世界、ネコの目で見た色彩あふれる夜の世界が交互に出てきます。少し説明的な文章なので、高等部でも喜ばれます。ある特別支援学校の高等部では、読み聞かせをする前に、「ネコは夜よく目が見えそうです。その特徴を生かした絵本です。」と言って読んだことがあります。

5 昔話絵本

今、私たちは絵本によって世界各地の昔話を楽しむことができます。昔話は本来、人から人に語り伝えられてきたお話です。読み聞かせには、耳で聞いてわかりやすい、よい再話の絵本を選びます。安易に話を変えたり、表面的な教訓を押しつけているようなものではなく、昔話本来の素朴な楽しさを味わえる作品を選びましょう。

長い間語り伝えられてきた昔話には、私たちの祖先の知恵や勇気、大人から子供への様々な願いが込められています。ストーリーに沿ってゆっくりと、素直に読めば、お話は子供の心に染み込んでいくでしょう。

『おおきなかぶ　ロシアの昔話』 A.トルストイ 再話
内田莉莎子 訳　佐藤忠良 画
福音館書店　978-4-8340-0062-7　★

おじいさんがカブを植えました。すると、甘い元気のよい大きいカブができました。おじいさんは「うんとこしょ　どっこいしょ」と、カブを抜こうとしますが、抜けません。おばあさんを呼んで一緒に引っ張りますが、抜けません。孫、犬、ネコを次々と呼びます。最後にネズミを呼んで引っ張って、カブはやっと抜けます。

子供も大人もよく知っている、ロシアの昔話絵本。「おばあさんがおじいさんをひっぱって、おじいさんがかぶをひっぱって　うんとこしょ　どっこいしょ」の繰り返しが、子供は大好きです。ロシアの農民の雰囲気がよく表現された絵をしっかりと見せながら、ゆっくりと読んでいきます。

特別支援学校に出かけて、この絵本の読み聞かせをすると、参加者全員で声を合わせて読むことがよくあります。「うんとこしょ　どっこいしょ」の節やアクセントは、その学校独自の読み方もあるので、なるべくそちらに合わせて読みます。「うんとこしょ　どっこいしょ」で体を前後に揺らしたり、「それでもかぶはぬけません」で手を顔の前で振ったりと、ジェスチャーつきの学校もあります。

読み終わったら表紙と裏表紙を広げ、登場人物たちがカブを担いでいる絵を見せます。大型絵本を使用すると、子供たちは更に喜びます。

中学部や高等部でも喜ばれます。ある特別支援学校の高等部では、絵本を見せると、一人の生徒が声をあげました。この生徒は、自分の絵本を学校に持ってきて、皆で読んでいるそうです。大好きなお話なのでしょう。このときは参加者全員で、「うんとこしょ　どっこいしょ」と声をそろえて読みました。

『おおかみと七ひきのこやぎ　グリム童話』　フェリクス・ホフマン え　せたていじ やく

福音館書店　978-4-8340-0094-8　★★

お母さんヤギが出かけると、留守番をしている子ヤギたちの家に、オオカミがやってきます。子ヤギたちはお母さんだと思って戸を開けてしまいます。オオカミはたちまち６匹を飲み込み、柱時計の箱に隠れた末の子ヤギだけが助かります。お母さんヤギと末の子ヤギは、野原で寝ているオオカミのお腹を切り開いて、６匹を助け出し、代わりに石を詰め込みます。目を覚ましたオオカミは、水を飲もうとして、井戸に落ちて死んでしまいます。

グリムの有名な昔話。起承転結のはっきりした、わかりやすいストーリーです。ヨーロッパの雰囲気がよく伝わってくる格調高い絵が、子供たちに強い印象を与えます。細かなところまで丁寧に描かれた絵をじっくりと見せながら、読んでいきます。

オオカミがヤギたちの家に飛び込んだ場面や、オオカミが井戸に落ちる場面は勢いよく読むと、ストーリー全体にメリハリがつきます。

『さるとかに』　神沢利子 文　赤羽末吉 絵

銀河社　978-4-87412-001-9　★★

サルとカニはカキの種とむすびを交換し、カニは種を庭に埋めます。カキの木に実がなり、カニはうれしくて実を取ろうとしますが、うまく木に登れません。そこへやってきたサルが木に登り、熟れたカキは自分で食べ、カニには青ガキを投げつけます。カニはつぶれてしまい、その腹からたくさんの子ガニが産まれます。子ガニたちはクマンバチ、クリ、ウシのふん、臼の助けを得て、サルを退治します。

ストーリーの面白さと迫力のある絵が見事です。

登場人物の会話が多いので、今、話をしているのが誰なのか、理解しやすいように読みます。カニがカキの木を育てるところには、歌が出てきます。節をつけて、期待感を持って楽しく読みます。

文章量が多いので、すべてを通して聞くのが難しい子供には、思い切ってポイントを押さえて話したこともあります。

例えば、本文の子ガニが仲間と出会う場面では、登場人物の会話をやめて、「くまんばちがぶんぶん飛んできて、仲間になりました。子ガニががしゃがしゃ、くまんばちがぶんぶん進んでいくと、クリに会いました。クリも仲間になりました。」のように変えました。そしてジェスチャーも交えて話しました。ある特別支援学校では、興味を持って絵本を最後まで見ている生徒もいました。

『こぶじいさま　日本の昔話』　松居直 再話　赤羽末吉 画

福音館書店　978-4-8340-0788-6　★★

額にこぶのあるじいさまが、山のお堂に泊まっていると、大勢の鬼がやってきて、歌い踊り始めます。こぶじいさまも、いっしょに夜明けまで歌い踊ります。鬼は明日も来るようにと言って、じいさまのこぶを取ってしまいます。その話を聞いた隣の家のこぶじいさまもお堂に行きます。鬼どもの前でめちゃくちゃに踊り歌うと、鬼は怒って、昨日のじいさまのこぶを隣のじいさまの額に打ちつけてしまいます。

Ⅱ

よく知られた日本の昔話です。カラーと白黒のページが交互に描かれ、独特の印象を与えます。鬼が怖くはあっても、どことなくユーモラスな存在で、不思議な雰囲気を醸し出しています。子供たちは鬼の歌をとても喜ぶので、力強く、リズミカルに読むようにします。読み終わったら、表紙と裏表紙を広げて、色彩豊かな鬼どもの絵を見せます。

中学部・高等部でも楽しめます。ある特別支援学校の中学部では、読んでいる途中から、一人の生徒が隣の生徒に向かって、各ページの文章の終わりを繰り返し語り始めました。歯切れのよい文を楽しんでくれたのでしょう。

『三びきのやぎのがらがらどん　ノルウェーの昔話』

マーシャ・ブラウン え

せたていじ やく　福音館書店　978-4-8340-0043-6　★★

３匹のヤギのがらがらどんがいました。山の草場へ行こうとすると、谷川に橋が架かっています。一番小さいがらがらどんが橋を渡ると、橋の下にすむトロルが食ってやるとどなります。小さいがらがらどんは、自分より大きい２番目ヤギが来ると言って渡っていきます。２番目のがらがらどんも大きいヤギが来ると言います。そこへ大きいヤギのがらがらどんが現れます。大きいがらがらどんは、トロルに飛び掛かり、こっぱみじんにして谷川へ突き落とします。３匹は草場に行ってとても太ります。

小さいヤギが知恵を絞って、トロルから逃げ出し、最後に大きいヤギがトロルをやっつけます。テンポのよい繰り返しと、満足のいく結末が子供たちを喜ばせる名作です。ヤギの大きさによってメリハリをつけて読みます。橋を渡る「かたこと」「がたん、ごとん」などの擬音語はテンポよく、大きいヤギやトロルの声などは、小さいヤギに比べて間合いをとって、ゆっくり読むと効果的です。絵本を見せると、「知ってる。」との声がよくあがります。お話を理解できなくても、擬音語を楽しんだり、迫力のある絵に興味を示す子供もいます。

ある特別支援学校の小学部で読んだときには、先生も一緒に「がたごと　がたごと」と言ってお話

を盛り上げてくれました。このクラスでは、多くの児童が擬音語を楽しんでいました。
　読んでいる途中、一人の児童が目の前にやってきて、手を伸ばしてきたことがありました。とても絵本に興味を持ったようで、読み手から絵本を受け取ると、確かめるように眺めてから、戻してくれました。
　中学部では一場面ごとに声を出している生徒がいました。その生徒は、大きなヤギのがらがらどんがトロルをやっつけるところで、「えー、こわーい。」と声をあげていました。

『ずいとんさん　日本の昔話』　日野十成 再話　斎藤隆夫 絵
福音館書店　978-4-8340-2151-6　★★

　お寺の小僧ずいとんさんが留守番をしていると、「ずーいとん　ずーいとん」と呼ぶ声がします。キツネが庫裏（くり）の戸にしっぽを「ずーい」とこすりつけ、頭の後ろで「とん」と叩いていたのです。逃げたキツネを追いかけて本堂に入っていくと、御本尊様が２つ並んでいました。ずいとんさんは、御本尊様は、お経をあげると舌を出すと言い、舌を出した御本尊様を叩きます。姿を現したキツネは、「ケーン」と鳴いて山へ逃げていきました。

　ずいとんさんとキツネのだましあいが楽しい日本の昔話。ユーモラスな表情のずいとんさんとキツネが、お話の雰囲気によく合っています。のんびりとしたお話のイメージを生かして、ゆっくりと読んでいきます。絵が細かいので少人数で読むとよいでしょう。２人の掛け合いや、話のおちへの理解が必要になるので、障害の軽い子供や、中学部・高等部で楽しめます。「ずーいとん」という音も喜ばれます。

『だごだごころころ』　石黒渼子・梶山俊夫 再話　梶山俊夫 絵
福音館書店　978-4-8340-1218-7　★★

　ばあさんは転がった「だご」を追いかけ、穴に入ります。すると、赤鬼につかまり、ひとまぜするごとに粉が増えるしゃもじで、毎日「だご」を作らされます。お祭りの日、鬼どもは酒を飲んで踊ると、眠ってしまいます。ばあさんが逃げ出すと、昔助けたトンボが舟に乗せて漕いでくれます。鬼どもが追いかけてきて、川の水を飲みます。ばあさんがしゃもじで水を漕ぐと、水がどんどん増え、鬼どもの腹は破裂します。無事家に帰ったばあさんは、持ち帰ったしゃもじを使って、じいさんとだごやを始めます。

「だご」とはだんごのことです。個性的な線によって、のどかな表情のじいさんばあさんと迫力ある鬼がユーモラスに描かれています。鬼と人、動物たちが交流するおおらかな昔の世界のイメージです。

働き者のばあさん、ちょっと間の抜けた鬼どもなどの個性を生かすように読みます。ばあさんが船に乗って逃げるところは、緊迫感を持って読むと、お話全体にメリハリがつきます。赤トンボがなぜ赤いのか、との由来譚にもなっているので、秋に読み聞かせると印象に残る作品です。「だご」が川を渡っていく場面など、絵が細かいところは、指でさしながら読むとよいでしょう。

『ゆきむすめ　ロシアの昔話』　内田莉莎子 再話　佐藤忠良 画

福音館書店　978-4-8340-0093-1　★★

子供のいないおじいさんとおばあさんが、雪でかわいらしい女の子を作りました。すると、ゆきむすめは動き出し、おじいさんとおばあさんはたいそうかわいがって育てます。ゆきむすめは賢く美しく成長しますが、夏のある日、焚き火を飛び越えたとたん、姿が消えてしまいます。

北国を印象付ける、味わい深いロシアの昔話。厳しい冬から雪解けの春、人々が外へ飛び出す夏へと巡るロシアの自然が舞台になっています。やわらかく美しい色彩の絵がお話の世界を見事に表現しています。

話の流れに沿ってゆっくりと自然に読んでいけば、子供たちにお話のよさが伝わっていきます。

6 知識の絵本

知識の絵本には、子供たちが自分の身の回りのことを確認したり、絵や写真を通して読み手と言葉をかわすなど、物語絵本とは違った楽しみ方があります。特に食べるもの、暮らし、動物、虫、乗り物、世界の人々などをテーマにした本は、子供たちの興味を引くとともに、学習にも活用できます。一人一人の子供の興味や関心に寄り添って、その子の好きなテーマの本を読み聞かせるとよいでしょう。

また多様な経験をする機会の少ない子供たちにとっては、知らない世界と出会える場にもなります。全く関心がなさそうなテーマであっても、急に興味を持って、絵本を見つめたり、言葉をかけてきたりすることもあります。

物語絵本では最初から最後まで読まないとストーリーはわかりませんが、知識の絵本では子供が興味を持つ場面だけを読んでも理解できます。始めは、好きな部分を楽しむだけだったのが、他のページにも興味が広がることもあります。本文通りに読むと理解できないときには、日常に結びついた言葉にかえて読むとよいでしょう。

近年、知識の本は、新刊の３割を占めるほど多く出版されています。ここでは、テーマも手法も多様な本の中から、特別支援学校の子供にとって理解しやすい知識の本を以下の条件で選びました。

- テーマの展開（構成）が、わかりやすく、シンプルである。
- イラストや写真が的確で、読者の理解を助けている。
- １冊を通して、一つのテーマを扱っている。
- 子供の身近なテーマや関心の高いテーマを取り上げている。

食べるもの

『みかんのひみつ』

岩間史朗 写真

ひさかたチャイルド　978-4-89325-068-1　★★

内容：写真絵本／ミカンをむく／実／房／小さな粒／粒の中はジュース／ミカンの実の成長／ミカンの皮の中／ミカン畑／ 22種類のミカン／ 22種類のミカンの輪切り

一つのミカンがあります。簡単な仕掛け絵本になっていて、めくっていくと、ミカンの実、続いて房が現れます。最後は一つの房に入っていた粒がバラバラになって、並んでいます。一つの房で粒が270以上もあります。粒の中にはジュースがいっぱい。だからミカンを絞るとジュースが出てくるのです。仕掛けを上手に使いながら、一歩一歩ミカンの仕組みを解き明かしています。

最後に形も色もさまざまなミカンが、22種類、ずらりと並んでいます。ページをめくると、22種類のミカンが輪切りになって、同じ位置に並んでいます。このように随所に工夫があり、子供たちの障害に応じて、読み聞かせることができます。

小学部から高等部まで、様々な年齢の児童・生徒に読み聞かせをしましたが、身近なテーマなので

どの学校でも興味を持ってくれました。特に最後の場面では、どれが食べたい？と聞くと、好きなミカンを指でさしたり、レモンと言ったり、ミカンの種類を聞いてくる生徒もいました。また一房のミカンに粒が270も入っているページでは、驚きの声を上げる児童もいました。ミカンを食べ始める季節に読むと、さらに関心が高まるでしょう。

『ぼくのぱんわたしのぱん』

神沢利子 ぶん　林明子 え

福音館書店　978-4-8340-0849-4　★★

内容：パン作りに取り組む３人の子供／材料／イースト／生パンをこねる／寝かす／成形／パンを焼く／できあがり

パン作りのレシピのような絵本です。材料や作り方をわかりやすい絵で示しています。ページの左上に描かれた時計を見ると、どれくらいの時間がかかるか、わかります。形を作る場面では、バターロール、ねじりパン、ネコパン、ゾウパン、足型パンなど楽しいパンができています。子供たちが焼いたパンが並んだ裏表紙も忘れずに、見せてください。

３人の子供たちの会話が聞こえてくるような楽しい絵本です。

『おすしのさかな』

ひさかたチャイルド　978-4-89325-381-1　★★

内容：写真絵本／握り寿司の写真／お寿司は何からできているかという問いかけ／海を泳ぐマグロ／漁師が捕まえたマグロ／マグロの解体／マグロのお寿司の作り方／できあがり／同様の構成でアジ、サケ、イカとエビのお寿司ができるまで／たくさんのお寿司とその魚の一覧

「おいしそうなおすし。おすしはなにからできている？　ごはんとのりと、それからね…」の呼びかけで始まり、ページをめくると大きなマグロが海を泳いでいます。捕まえたマグロを魚屋さんが切ります。どんどん小さく切って､最後はサクにします。次にお寿司屋さんの登場です。寿司飯を作り、マグロを薄く切って、握ります。

普段食べているお寿司が、どうやって作られているかを教えてくれる絵本です。海の中を泳いでいる魚がお寿司になるということが、納得できます。お寿司が好きな子供なら大いに楽しめます。おしまいに17種類のお寿司が勢ぞろい。ページをめくると、そのお寿司のネタとなった魚が同じ位置にいます。好きなお寿司を探しながら、もとの魚を知ることができます。魚屋さんやお寿司屋さんがどのような仕事をしているかという切り口で取り上げてもよいでしょう。

『和菓子のほん』

中山圭子 文　阿部真由美 絵

福音館書店　978-4-8340-2304-6　★★

内容：春夏秋冬の和菓子／和菓子ごよみ／和菓子と年中行事／材料と作り方／道具／器／香り／和菓子のデザインのヒントになった文様／江戸時代の和菓子の本

日本の四季を表現した和菓子を美しいイラストで紹介しています。「小蝶」、「たんぽぽ」、「菜の花きんとん」…。黄色と緑を基調とした春の和菓子からは、早春の香りが漂ってきます。また、桜を題材にした「桜だより」、「ひとひら」、「花ごろも」、「花見桜」など、きれいな名前の桃色の和菓子が並んでいます。夏の和菓子は涼しげ、秋は赤、黄、茶などにぎやかな色どり、冬は寒さを感じる白や青が目立ちます。

子供は、和菓子にはあまりなじみがないかもしれませんが、美しく、おいしい和菓子をゆっくり見せるようにします。「和菓子ごよみ」では、１月は「松の雪」、２月は「玉つばき」、３月は「蝶の夢」のように、その月の代表的な和菓子を並べて、こよみにしています。それぞれの子供の生まれ月の和菓子を探してみるのも楽しいでしょう。ひな祭り、子どもの日、お盆、お月見など年中行事でいただく和菓子もあります。年中行事と結びつけて紹介するのもいいでしょう。

後半では和菓子の材料や作り方、道具などが紹介されています。難しいところもあるので、きれいなデザインや色どりなど、子供に合わせて楽しめるところを選ぶとよいでしょう。

生き物

『からだのなかでドゥンドゥンドゥン』

木坂涼 ぶん　あべ弘士 え

福音館書店　978-4-8340-2391-6　★

内容：男の子と女の子が互いの体の中の音を聞くと、「ドゥンドゥン」と音がする／犬とネコでは「トゥックン、トゥックン」「ウックン、ウックン」／トカゲ、鳥、クマなどの動物の音／命の音

「きいてごらん　おとがする　からだのなかで　ドゥン　ドゥン　ドゥン　ドゥン　おとがする」の呼びかけで始まります。男の子と女の子が相手の胸に耳を当てて、音を聞いています。続いて犬とネコが音を聞きあっています。犬は「トゥックン　トゥックン」、ネコは「ウックン　ウックン」、空を飛ぶ鳥は「タク　タク　タク」、山のクマは「ドゥウン　ドゥウン」。海や森、空や地面の下で、生き物たちの心臓の音がリズミカルに繰り返され、耳に心地よく響きます。

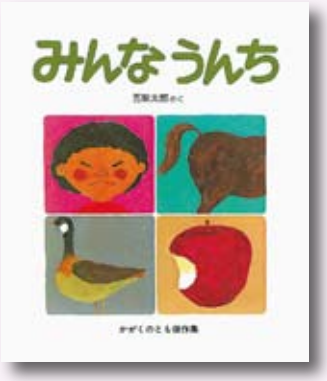
すべての生き物の体の中で心臓が、命が、脈打っていることを伝える絵本です。内容は理解できなくても、リズミカルな言葉の繰り返しや伸び伸びとした愛嬌のある動物たちの絵は共感を呼ぶでしょ

う。それぞれの動物の体の中の音を想像して、小さな動物は速く、大きな動物はゆっくりとリズムを取って、繰り返し読んでください。

『みんなうんち』

五味太郎 さく

福音館書店　978-4-8340-0848-7　★



内容：ゾウとネズミのうんち／動物のうんちはいろいろな形、色、においをしている／うんちをする場所／人間のうんち／後始末のやり方／生き物は食べるからうんちをする

Ⅱ

ゾウ、ネズミ、ヒトコブラクダとフタコブラクダ、魚、鳥、次々と登場する動物がみんなうんちをしています。動物によって、うんちの形や色、においが違います。うんちのやり方も、止まってするカバ、歩きながらするシカ、あちらこちらでするウサギ、決めたところでする人間など様々です。最後は、ずらりと並んだ動物たちが食べものを口にいれながら、「いきものは　たべるから」、次のページで後ろ向きになってうんちをする動物たちに「みんなうんちをするんだね」の文が添えられています。

すべての生き物は、食べて排泄をすることをストレートに教えています。うんちはちょっといやという子供も、デザイン化された明るい絵なので素直に受け取ることができるようです。

「ひとこぶらくだはひとこぶうんち」「へびのおしりはどこ？」「くじらのうんちは　どんなの？」など、ユーモラスな面もあり、中等部や高等部の生徒も楽しめます。

『ひよこ』

柿澤亮三 指導　福武忍 絵

フレーベル館　978-4-577-03558-0　★

内容：２個のタマゴ／タマゴからヒヨコが孵化／ヒヨコの成長／メンドリとオンドリ／有精卵と無精卵／いろいろな鳥とそのタマゴとヒナの比較

２個のニワトリのタマゴがあります。１個からふわふわのヒヨコが生まれましたが、もう１個からは生まれません。孵化しなかったタマゴは、オスと出会わなかったメスが生んだのです。タマゴの絵が実物大なので、本物のタマゴを持ってきて並べてみると、子供の興味を引くでしょう。黄色いヒヨコが大きくなるにつれて、白い羽が増えて、真っ白なメンドリになります。

後半では、11個のタマゴが描かれ、次のページでは同じ位置にそれぞれの生まれたばかりのヒヨコが、３ページ目にはさらに成長したヒヨコが親鳥といっしょに描かれています。どのタマゴがどのヒヨコになるか、当てるのも楽しいでしょう。３冊用意して、３か所のページを並べると、成長の過程がわかります。

白地に対象物だけがはっきりと描かれているので、視覚的にわかりやすく、ふわふわしたヒヨコの愛らしさは子供の共感を呼ぶでしょう。11個のタマゴのうち、10個は鳥ですが、１個だけワニなの

で、仲間（種類）の違いに触れることもできます。

『まるまるだんごむし』

榎本功 写真

ひさかたチャイルド　978-4-89325-062-9　★

内容：写真絵本／指でつつくとまるくなるダンゴ虫／暗いところにいる／アリに出会うとまるまって身を守る／赤ちゃんもまるくなる／冬になると土の下でまるまって眠る

ダンゴ虫がまるくなることをテーマにしています。どうやってダンゴ虫がまるくなるかを拡大して見せています。まるくなることで、身を守っていることがわかります。ダンゴ虫は身近な場所で見つかるので、実物を見せてから読むと効果的です。ダンゴムシを見せられないときには、最初のページに実物大のシルエットがあるので、これを示して、本当の大きさを知らせるとよいでしょう。

『かぶとむし　かぶとむしの一生』

新版　得田之久 ぶん・え

福音館書店　978-4-8340-2565-1　★

内容：カブトムシの幼虫（オス）／脱皮／サナギ／羽化／樹液に集まる虫たち／一番強いカブトムシ／メスとの出会い／メスの産卵／カブトムシの死／幼虫の成長

40年前に描かれた絵本を新しくわかった事実をもとに、書き直し、新版として出版しています。カブトムシのオスの一生が、力強く端正な絵で描かれ、長年愛読されてきたことが納得できます。

カブトムシ以外にも樹液に集まる様々な虫の絵が、余白に描きこまれています。虫の好きな子供には、すみずみまで楽しめる１冊です。

説明が詳しいので、子供によって、わかる言葉に言いかえるとよいでしょう。

『うさぎ』

中川美穂子 指導　内山晟 写真

フレーベル館　978-4-577-03560-3　★

内容：写真絵本／生まれて１日目の子ウサギ／５日目、10日目と子ウサギの成長を追う／20日目に外に出てエサを食べて、遊ぶ

生まれてから20日までの子ウサギの成長を描いた写真絵本です。目も開いていないピンク色のあかちゃんに、毛が生えて、歩き出す様子を実物大の写真で見せています。ここまで小さいウサギのあかちゃんを見る機会は少なく、成長ぶりが手に取るようにわかります。飛び跳ねたり、毛づくろいをしたり、お母さんウサギに甘えたり、その仕草は愛らしく、思わずなでてしまう子供もいるでしょう。巻末にウサギの飼育法があり、実際に飼った時の参考になります。実物大の写真には「しゃしんのうさぎは　ほんとうのおおきさです。」と明記されているので、成長の度合いがわかり、理解を助けてくれます。

『鳥のこと』（自然スケッチ絵本館）

キャスリン・シル 文　ジョン・シル 絵　鈴木有子 訳

玉川大学出版部　978-4-472-05922-3　★★

内容：鳥の羽毛／タマゴ／巣／鳥の移動／くちばし／鳥の歌／鳥は仲間

鳥とはどんな生き物かを簡潔な文章と絵で示した絵本です。１ページに、説明は、簡潔な一文のみ。「鳥は、羽毛を持っています。」、「ヒナは、卵から生まれます。」、「地面の上に、じかに巣をつくる鳥もいます。」など、どれも鳥について、基本的で大切な事実を述べています。文の隣りのページには、その事実に即した細密な絵が添えられています。「鳥は、いろいろな方法で動きまわります。」には、カナダガンが芦の生える湖を渡っていく絵、「泳いで動きまわる鳥もいます。」には、オシドリの夫婦が水に浮かんでいる絵が描かれています。最後の「鳥は、私たちの大切な仲間です。」の文章には、野鳥がエサ台や池に舞いおりている庭と窓越しにそれを見守る人の心温まる絵が添えられています。文章はシンプルですが、絵からいろいろなことを読み取って楽しむことができます。

原書がアメリカで出版されているので、日本になじみのない鳥が登場するのがやや難点です。巻末の解説では日本での状況にも触れているので、適宜説明を加えるとよいでしょう。

「自然スケッチ絵本館」は、『甲殻類のこと』『有袋類のこと』『は虫類のこと』『両生類のこと』『ほ乳類のこと』『軟体動物のこと』『魚のこと』『鳥のこと』の全８巻。各巻が同じ構成で、動物の基本的なことを取り上げています。

『あおむしくん』

久保秀一 写真　七尾純 文

偕成社　978-4-03-344270-9　★★

内容：写真絵本／アゲハチョウのタマゴ／孵化／毛虫からアオムシへ／テントウムシとの遭遇に角を出す／サナギ／羽化

サンショウの葉っぱの上にまるいタマゴがあります。タマゴから小さな毛虫が生まれ、葉っぱをむしゃむしゃ食べて大きくなります。毛虫からアオムシへ脱皮。敵と出会うと嫌なにおいのする角を出して、身を守ります。

アゲハチョウの成長がお話仕立てになっていて、エリック・カールの『はらぺこあおむし』（➡p 23）を連想させます。お話にぴったりな写真なので、虫に関心のない子供でも、脱皮、羽化、擬態など虫の生態を楽しく学べます。脱皮やサナギへの変態、羽化などの場面では、幾つもの写真を時系列に並べています。ひとつひとつ、指さして順番を示しながら読み聞かせるとよいでしょう。日本で最も多く見かけるアゲハチョウを取り上げています。実物を見たことがあれば、更に興味を持つでしょう。

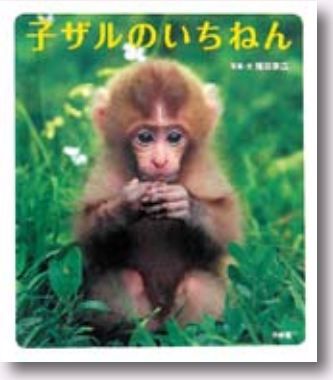
同じシリーズの『ざりがにちょっきん』も、やはりおはなし仕立てで、親しみやすく見た目もユーモラスなザリガニの成長を丁寧に語っています。

『子ザルのいちねん』

福田幸広 写真・文

小学館　978-4-09-726361-6　★★

内容：写真絵本／春、子ザルの誕生／お乳を飲む子ザル／夏、友だちと遊び始める／草を食べる／秋、木の実の見つけ方を覚える／恋の季節／冬、吹雪に耐える／温泉へ入る



長野県の地獄谷で生まれた子ザルの10か月をとらえた写真絵本です。自然の中で伸び伸びと育つ子ザルの気持ちが伝わってくる写真が並んでいます。単純でわかりやすい文章なので、そのまま読んでもよいし、興味のありそうな箇所だけ選んで読んでもよいでしょう。特に、雪の中、温泉で温まっているサルたちはどこかユーモラスで、共感を呼びます。

『ほね』

堀内誠一 さく

福音館書店　978-4-8340-0864-7　★★

内容：魚の骨／人間の骨／骨の役割／いろいろな動物の骨／脊椎動物の類似性／ビルなどの構造／骨の化石

魚には骨があります。骨がないとタコのようにぐにゃぐにゃしてしまいます。人間も同じこと。骨があるので、立ったり、体を動かすことができます。内臓や脳を守る骨の役割や他の動物の骨格について説明しています。人間のがい骨が描かれた場面は、子供の興味を引きます。自分の腕に触りながら動かしてみると、骨が動くのがわかり、実体験と本に書かれていることがつながります。黒を背景

にワニやライオン、馬、カエルなどが白い骨だけで踊っているページがあります。ページをめくると、血肉のついた動物が同じ格好で踊っています。がい骨の場面を見せて、何の動物の骨か、クイズにすることもできます。しゃれたユーモラスのある絵なので、中等部や高等部の生徒にも受け入れられます。

植物

『あさがお』

柳宗民 指導　斎藤光一 絵

フレーベル館　978-4-577-03551-1　★

内容：アサガオの種まき／根の成長／発芽／本葉の成長／ツル／花／虫による受粉／実と種

アサガオの一生を一場面ごとに、ゆっくりと丁寧に取り上げています。例えば、種まきでは、地面の中まで描いているので、具体的な種の埋め方がわかります。続いて種から根が伸び、双葉が出てきます。本葉が増えて、ツルのまきつき方、ツボミが開いていく様子などが順を追って描かれています。

一粒のアサガオの種から伸びたツルには、300から400粒の種ができます。それを示すために、種を360粒並べて描くなど、具体的な表現がわかりやすく工夫されています。アサガオを育てる機会があれば、それぞれの成長段階を本と実物で比較しながら、確認することができます。

『どんぐりころころ』

片野隆司 写真

ひさかたチャイルド　978-4-89325-066-7　★

内容：写真絵本／両手のひらにいっぱいのドングリ／木に実っているドングリ／ドングリの成長／17種類のドングリ／ドングリを食べるカケス、リス、ネズミ／地面に落ちたドングリ／芽が出たドングリ

横長の紙面を使って、1枚の写真を見せているページが多く、子供の注目を引きやすい構成です。特に、ドングリを拾った体験があれば、子供たちと思い出しながら、興味のあるページを読むとよいでしょう。いろいろな大きさや形のドングリが17種類並んでいるページは、見ているだけで楽しくなります。実物のドングリを写真の隣に並べて、名前を調べるのも、面白いでしょう。次のページにはその17種類のドングリが木で実っている写真がありますが、位置が違っている点が使いにくく、少し残念です。

後半には、カケス、リス、ネズミなど小動物がドングリを食べている写真があります。ドングリを

くちばしでくわえたり、両手に持ってかじったりしている様子は生き生きとしています。動物の好きな子供はこのページを喜んでくれるでしょう。

『びっくりまつぼっくり』

多田多恵子 ぶん　堀川理万子 え
福音館書店　978-4-8340-2581-1　★

内容：「ぼく」が見つけたマツボックリは開いている／中からうすい羽のようなものが出てきた／雨の日マツボックリが小さくなっていた／持って帰って、翌朝見たら開いていた／マツボックリの手品をしよう

乾燥していると、花びらのように開くマツボックリ。水にぬれると閉じて、小さくなります。その仕組みを使って、「びっくり　びんづめ　まつぼっくり」の手品ができます。マツボックリが閉じている時にガラスビンに入れ、乾くと中で大きくなって、ビンを逆さにしても出てきません。子供の気持ちに沿った素朴で、温かな絵です。文章もわかりやすく、お話仕立てなので読み聞かせに向きます。

身近なマツボックリでこんな不思議で楽しい実験ができることにも驚きます。ぜひ実際にやってみてください。

『さくら』

長谷川摂子 文　矢間芳子 絵・構成
福音館書店　978-4-8340-2495-1　★★

内容：満開のサクラ／鳥の訪問／花が散る／サクランボが実る／夏、虫の訪問／紅葉／落葉／裸木／花芽／再び満開

１本のサクラの木の１年を追った美しい絵本です。花が咲いたときだけに目を向けがちですが、それ以外の季節にも命の営みがあります。小さなサクランボや青々と茂った葉、春に向けて膨らんだ花芽。またサクラの枝や葉には、アリやセミ、毛虫が隠れています。じっくりと探してみてください。

春先だけでなく、四季を通して楽しめる絵本です。

『かじだ、しゅつどう』

山本忠敬 さく

福音館書店　978-4-8340-0428-1　★

内容：消防署のブザーが鳴る／消防自動車の出動／消火活動開始／子供の救出／怪我人の搬送／消火完了／消防署に帰る／消防自動車の掃除

ビルが火事になり、消防署からポンプ車、スノーケル車、レスキュー車、救急車が出動します。ホースを消火栓につないで放水開始、はしご車のリフトに乗って、６階に残された子供を救出など、隊員の行動を的確に伝えています。隊員の一員となって働いているような臨場感のある絵です。消防自動車の好きな子供はもちろん、車に興味のない子供でも緊張感のみなぎる現場に関心を持ち、消防署の仕事への理解が進むでしょう。

表紙と裏表紙が一つの絵になっているので、読み終わったら本を広げて見せてください。『しょうぼうじどうしゃじぷた』（➡p 25）とあわせて、楽しむことができます。

『大きな運転席図鑑　きょうからぼくは運転手』

学研教育出版　978-4-05-203278-3　★★

内容：10種類の乗り物の運転席を大きな写真で紹介／新幹線、電車、路線バス、はしご車、ショベルカー、帆船、潜水調査船、ドクターヘリ、飛行機、スペースシャトル／各乗り物の運転の仕方、道具などをイラストで紹介

33㎝×50㎝の大きな画面を使った新幹線の運転席の写真には、機械や計器類が並び、窓からは前方の景色が見えます。機械には白字で「②電圧計」「⑥戸じめランプ」「⑨運転しえんモニタ」など細かく名称がつけられ、下段にはその機械の役割が説明されています。まさに、運転席に座っているような臨場感を味わうことができます。乗り物好きな子供なら夢中になること間違いありません。

次のページには、運転の仕方がイラスト入りで説明され、まるで運転マニュアルのようです。「運転しているのはこんな人」として、運転手と道具が写真で紹介されています。行路表や懐中時計など、実物写真なのが大きな魅力です。はしご車では、空気ボンベやロープ、懐中電灯、帆船では望遠鏡、安全ベルト、ナイフなどが、必要な道具として紹介されています。運転の仕方だけではなく、その仕事を理解する糸口にもなります。

10種類の乗り物を紹介する構成は、すべて同じで、子供が好きな乗り物から楽しむことができます。運転席の機械や、運転手の道具を指さしながら、ゆっくりとわかりやすく紹介します。

表紙の見開きは、イラストを使った目次になっていて、このイラストから好きな乗り物を選んで、ページ数を読み取り、該当の場所を開く体験ができます。裏表紙の見開きは「この本に出てきた乗り物たち」として、乗り物の写真と名前、大きさ、最高速度などが書かれているので、読み終わった後、再確認にも使えます。

この図鑑のショベルカーのページを最初に見せて、絵本『ざっくん！ショベルカー』（➡p 26）を読むなど、創作物語絵本への導入として使うこともできます。

続編に『大きな運転席図鑑プラス　運転手はきみだ！』があります。続編では、タクシー、救急車、ブルドーザ、白バイ、パトカー、蒸気機関車、電気機関車、レスキューヘリ、クルーズ客船、月面車、フォーミュラカーを取り上げています。

『新幹線のたび　はやぶさ・のぞみ・さくらで日本縦断』

コマヤスカン 作

講談社　978-4-06-132461-9　★★

内容：はるかとお父さん、新青森駅で「はやぶさ」に乗車／東京駅で「のぞみ」に乗り換え／新大阪駅で「さくら」に乗り換え／鹿児島中央駅下車

はるかとお父さんは、おじいちゃんとおばあちゃんに会いに、新幹線を乗り継いで、新青森駅から鹿児島中央駅まで行きます。その道中を大きな画面を使って描いています。画面を上下２段に分け、下の段には、はるかたちが座っている新幹線の座席、上の段には日本の絵地図が広がっています。その間には、新幹線の路線図が書いてあります。最初の地図には、東北新幹線、岩木山、八甲田トンネル、小川原湖、三沢空港、八戸駅などが描かれていて、地理の学習にも使えます。

子供たちが喜ぶのは、東京駅や新大阪駅の新幹線ホームでしょう。はるかたちといっしょに新幹線の旅をした気分を味わえます。東京近辺の地図では、東京スカイツリー、東京湾、成田国際空港、筑波山などがあります。いっしょに興味のありそうな場面や地図を見て、自由に話すのも楽しいでしょう。

仕事

『いちばんでんしゃのしゃしょうさん』

たけむらせんじ ぶん　おおともやすお え

福音館書店　978-4-8340-2666-5　★

内容：中央線の始発電車の車掌さんの仕事／前夜の宿泊／起床／出勤の確認／三鷹発始発電車乗務／乗降客の確認／ドアの開閉／アナウンス／緊急停止の合図／安全確認／東京駅着／折り返し電車に続けて乗務／忘れ物の無線連絡／忘れ物の発見／三鷹着／朝食

中央線の車掌のやまなかさんの仕事を描いた絵本です。三鷹車掌区の自動起床装置のベッドや車掌の持ち物、指さし点呼など、やまなかさんとともに体験することができ、車掌に憧れる子供に喜ばれるでしょう。

「やまなかさんは、ホームのていしいちをゆびさしてかくにんしました。『ていしいち　オーライ』やまなかさんはドアをひらきました。」

このように、やまなかさんの動作が具体的にはっきり書かれています。ページごとに時計があって、現在の時刻がわかるようになっています。駅で見る車掌さんの行動にどんな意味があるのかがよくわかります。長年、三鷹車掌区中央線の車掌として勤務してきた著者ならではの正確で、明確な内容となっています。

見開きに複数の場面が描かれているので、該当の絵を指さしながら読むと理解を助けます。文章量がかなりあるので、かいつまんで読んでもよいでしょう。

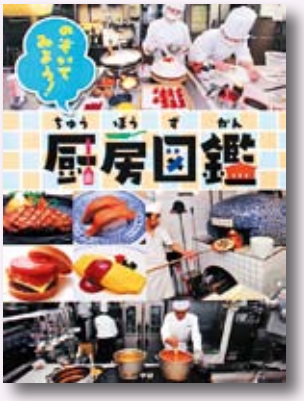
見返しには、東京駅から高尾駅までの路線図があります。東京の子供たちに勧めたい１冊です。

Ⅱ

『のぞいてみよう！厨房図鑑』

学研教育出版　978-4-05-203458-9　★★

内容：写真絵本／ 10の厨房とその料理を写真で紹介／洋食レストラン、ケーキ屋、ラーメン屋、とんかつ屋、ピザレストラン、ハンバーガーショップ、ステーキハウス、パン屋、回転寿司、ファミリーレストラン／厨房や道具の写真／厨房で作られた料理とその作り方／働く人／厨房のひみつ



具体的な店の厨房を写真で紹介し、道具や材料には「寸胴鍋」「レードル」「デミグラスソース」「車海老」など名前が明記してあります。次のページでは、その厨房で作られるご馳走が並んでいます。作り方の手順も写真で紹介されています。「厨房のひみつ」には、各店のこだわりが書いてありますが、洋食レストランでは「洋食はソースが決め手！」とオーナーシェフの言葉を紹介しています。

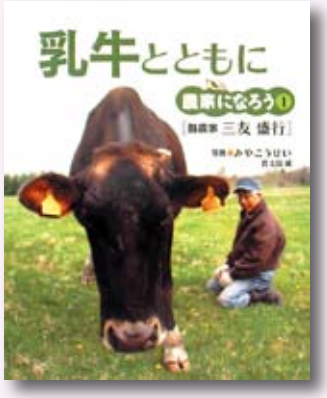
ご馳走がたくさん登場するので、それだけで食べ物に興味のある子供は喜ぶでしょう。料理の作り方は、実際には難しくてできなくても、どうやって作られているかがわかれば、食べものへの興味がさらに増すでしょう。接客業などの仕事に関心のある子供に手渡すと仕事への関心が一歩進むかもしれません。

『乳牛とともに　酪農家 三友盛行』（農家になろう１）

写真 みやこうせい　農文協 編

農山漁村文化協会　978-4-540-12184-5　★★

内容：写真絵本／北海道中標津町の酪農家の仕事を写真で紹介／牛飼いの仕事／乳搾り／放牧／夏の牧草作り／乾草作り／チーズ作り／春や秋の畑仕事や牧場整備、豚の飼育／冬の暮らし／子牛の出産



北海道の酪農家の一年の仕事を取り上げています。一日も休みのない牛飼いの朝から夜まで、また春夏秋冬の仕事が具体的に描かれています。仕事の厳しさだけでなく、楽しさや自然の雄大さを感じることができます。文章を読んで理解できるのは小学部高学年程度ですが、写真を見せながら、簡単な説明をすれば、子供も酪農家の仕事に興味を持つかもしれません。広々した牧草地をゆったりと歩む牛の姿は共感を呼ぶでしょう。

『ただいまお仕事中　大きくなったらどんな仕事をしてみたい？』

おちとよこ 文　秋山とも子 絵

福音館書店　978-4-8340-1616-1　★★

内容：28の職業を取り上げる／取材するのは小学生／仕事の内容をイラストと文章で紹介

制作にあたって、実際にその仕事に就いている人に取材をしているので、具体的で、信頼できる内容です。花屋さんは「見た目はきれいでもけっこうきつい…。お店に花をならべるまでに、だいじな仕事がいろいろあるのよ。」、動物園の飼育係は「飼育係は、動物のお父さんお母さんがわり。衣・食・住すべてに気をくばります。」など、働く人の率直な意見が興味深いです。

仕事の内容は、看護師なら「うちあわせ(もうしおくり)」「きろくのチェック」「くすりや注射のじゅんび」「おせわ」「びょうじょうかんさつ」「しどう」のように幾つにも分かれて紹介されています。

始めから読むと大変なので、興味のある職業から見ていくとよいでしょう。挿絵付きの目次があり、そこから仕事を選べます。

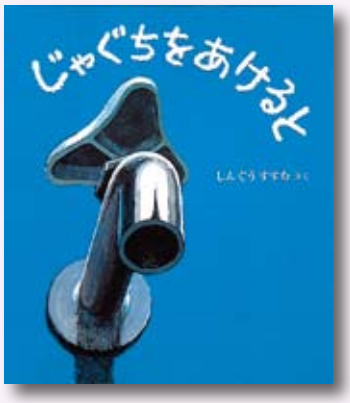
遊び

『じゃぐちをあけると』

しんぐうすすむ さく

福音館書店　978-4-8340-2401-2　★

内容：蛇口を開けると水が出る／水に手で触る／コップやスプーンに当てる／フライパンに水を入れる／蛇口を締める



蛇口から流れる水に手で触ったり、コップやスプーンを当ててみると、水の形が変わります。飛び散った形を見ると、水が滑り台や風船や宇宙船になったように見えます。水道の水を画面の中心に描き、流れる水の形をいろいろに変えた楽しい絵本です。

蛇口から絶えることなく流れる水は、子供にとっては不思議で、引きつけられるものでしょう。絵本を見ていると、思わず手を伸ばして、水に触れたくなります。蛇口をひねったり、水を手でたたくなど、絵本と同じようなジェスチャーを入れて読むと、一層興味を引きます。実体験で確認して、再び本を読むなど、広がりのある読書も楽しめます。

『しろいかみのサーカス』

たにうちつねお さく　いちかわかつひろ しゃしん

福音館書店　978-4-8340-2395-4　★★

内容：写真絵本／白い紙を折る／折った紙を立てる／家を組み立てる／紙を切る／紙をまるめる／まるめた紙の上に石を乗せる／蛇腹折りにして飛ばす／手で破いてお日様を作る

II

白い紙を折ると、立つようになります。折った紙を幾つも重ねると、立体物ができます。白い紙を折ったり、切ったりすることで、一枚の紙に変化が起きます。筒状にまるめた紙の上に、大きな石が載っている写真があります。弱い紙に重い石が載っても大丈夫なのだと、驚かされます。読み終わると、実際にやってみたくなるでしょう。

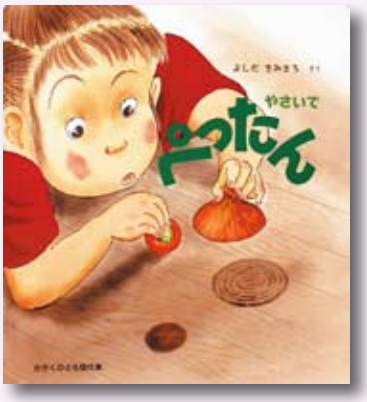
「かみをおる　いちにさん」「かみがたった　みんなどこいくの」などシンプルで呼びかけるような文章で語られています。文章を繰り返すなどして、一人一人にじっくり見せながら読みます。

読み終わった後、実際に紙を折り、表紙と同じ家を建てたことがあります。とても喜ばれました。

『やさいでぺったん』

よしだきみまろ さく

福音館書店　978-4-8340-1211-8　★★



内容：台所の床で見つけた玉ねぎの切れ端／床に押すと、玉ねぎの模様が映る／野菜の切れ端に絵具を塗ってスタンプのように紙に押してみる／野菜によっていろいろな形ができる／野菜の切れ端で絵を描く

おかあさんがカレーライスを作っていると、足元に落ちた玉ねぎの切れ端をスタンプにして、子供たちが遊び始めます。ニンジンの切れ端やジャガイモの皮に絵具を塗って紙に押すと、面白い模様や絵ができます。お父さんがサラダを作り始めると、ピーマンやセロリ、パイナップルの切れ端ができました。家族全員で、野菜のスタンプで絵を描いて遊びます。それから、夕食のカレーとサラダをいただきます。

お話仕立てで、野菜のスタンプ遊びを紹介しています。やり方も書いてあるので、実際にやってみることもできます。同じ切れ端を連続して押すと面白い模様ができます。

『おかしなゆきふしぎなこおり』

片平孝 写真・文

ポプラ社　978-4-591-13124-4　★★

内容：写真絵本／雪の様々な形／車の上の雪／森の雪／雪の足跡／雪の玉／霜／樹氷／つらら／氷

町や川、森に降り積もった雪の不思議な形を写真で見せています。大きな雪の帽子をかぶった家、渦巻きの形の雪をまとった木、白い霜に飾られた葉、競うように伸びたつらら。雪や氷の作った不思議で美しい写真一つ一つを簡潔な言葉で説明しています。

東京ではなかなか体験できない雪国の様子が伝わってきます。雪や氷の造形の美しさをじっくり見せてあげましょう。ある特別支援学校の中学部で読んだときには、屋根にかぶっている雪を「キノコ」、木に巻きついたように見える雪を「アイスクリーム」などと言う生徒がおり、やりとりを楽しみながら読みました。冬に読めば、季節を実感できます。

『おばあちゃんにおみやげを　アフリカの数のお話』

オニェフル 作・写真　さくまゆみこ 訳

偕成社　978-4-03-328490-3　★★

内容：写真絵本／主人公はアフリカ、ナイジェリアの男の子エメカ／おばあちゃんの家に行く途中に出会ったアフリカの人や手作りの物を紹介／２人の友達／３人の女の人／４本のほうき／子供が５人・・・／10人のいとことおばあちゃんに会う

男の子のエメカが、おばあちゃんのためにお土産を探しながら歩いていると、いろいろな人や物に出会います。帽子、首飾り、楽器、水がめ、臼と杵など、お金のないエメカにはどれも買えません。でも出迎えたおばあちゃんは、エメカが何よりのお土産だよと言って喜んでくれます。手作りの工芸品やそこに暮らす人々の明るい笑顔をとらえた写真絵本です。

アフリカの人びとの生活の一端を、民族衣装、土でできた家、手作りの箒や帽子、楽器などから知ることができます。独特の色彩とデザインを持つ民族衣装、素朴な手作りの箒や水がめなど、日本との違いと同時に共通点があることにも気づきます。

また副書名に「アフリカの数のお話」とあるように、人や物が１から10まで増えていく数の本でもあります。それぞれのページには、アラビア数字と漢数字、数字の読み方が書かれています。中学

部や高等部の生徒には、世界を知る１冊として、小学部の児童には数の本として活用できます。

『世界のだっことおんぶの絵本　だっこされて育つ赤ちゃんの一日』

エメリー＆ドゥルガ・バーナード 文・絵
仁志田博司,園田正世 監訳
メディカ出版　978-4-8404-1835-5　★★

内容：世界中の赤ちゃんがどんなふうにだっこやおんぶをされているか／ 11の民族の方法を紹介／グアテマラでは赤ちゃんはお母さんの体に巻きつけられた布の中にいる／カナダの北では、お母さんの上着のフードの中にいるなど

Ⅱ

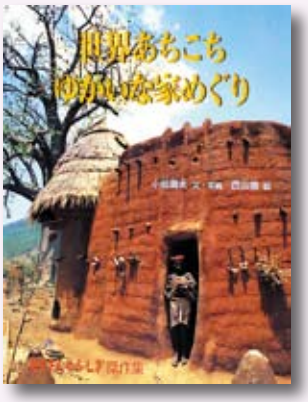
世界中で、色々な民族が赤ちゃんを抱っこしたり、おんぶをしたりして、大切に育てています。布に入れて前にぶら下げたり、布で背中にくくったり、民族独自のやり方で、赤ちゃんを運んでいます。

だっこやおんぶのやり方だけでなく、その家族の暮らしぶりもわかります。グアテマラではお母さんがトルティーヤを焼き、中央アフリカの熱帯雨林では男たちがミツバチの巣をとっています。

素朴で温かみのある絵です。世界の人々の独自な暮らしぶりを知ることができます。見返しに世界地図があり、本書で取り上げている人物がそれぞれの場所に描かれています。

『世界あちこちゆかいな家めぐり』

小松義夫 文・写真　西山晶 絵
福音館書店　978-4-8340-2073- 1　★★



内容：世界各地のユニークな家を写真とイラストで紹介／モンゴルのゲル／中国の土楼／インドネシアの竹と草の家／屋根に目のあるルーマニアの家／土の穴が住居のチュニジアの家／泥でできたアフリカのトーゴの家など

世界各地にあるゆかいな家の外観を写真で紹介。次のページをめくるとその家の内部が詳細なイラストで描かれています。外観からは思いもよらない暮らしぶりに感心したり、驚いたり。どの家もその土地の風土を生かして建てられています。

世界の人の様々な暮らしぶりがわかります。写真よりイラストの方が､暮らしの様子がわかるので、絵を中心に見ながら、紹介するとよいでしょう。

7 わらべ歌・手遊び

都立多摩図書館では、特別支援学校のおはなし会に、わらべ歌を取り入れてきました。わらべ歌を歌うと、知らない人の来訪に緊張していた子供が表情を和らげたり、絵本には興味を示さなかった子供が注意を向けるといったことがたびたびありました。特別支援学校の小学部はもちろん、障害の重い中学部や高等部でもわらべ歌や手遊びで歌いかけると、生き生きと応えてくれました。

1　わらべ歌とは

広義にはいろいろな歌が含まれますが、ここでは昔から伝承されてきた日本のわらべ歌を指しています。暮らしの中で、大人が赤ちゃんをあやしたり、寝かせたりする遊ばせ歌、子守歌、子供たちが遊びながら歌った遊び歌、季節や行事などの歌があります。「いないいないばあ」や「ずいずいずっころばし」など、誰もが小さい頃に出会った思い出があるでしょう。

２拍のリズムと狭い音域で歌うわらべ歌は、子供にとっては、歌いやすく、また心地のよいものです。意味はわからなくても、調子のよい言葉は心を浮き立たせます。何回か繰り返すと、子供の方が大人より早く覚えてしまうこともあります。

2　まずは楽しむことから

まず、大人が心を開いて、楽しむことが大切です。素朴なわらべ歌で呼びかけると、子供も大人もゆったりした気持ちになります。いっしょに歌うと、みんなで楽しもうという雰囲気が生まれます。

「○○ちゃん、あそぼ」と呼びかけるのも、わらべ歌と同じ働きかけになります。子供の名前を呼びかけ、「そこにいるのね。○○ちゃんが好きよ」と気持ちを相手に伝えることができます。そこから、子供と読み手の間で、笑顔のやりとり、言葉のやりとりが始まります。

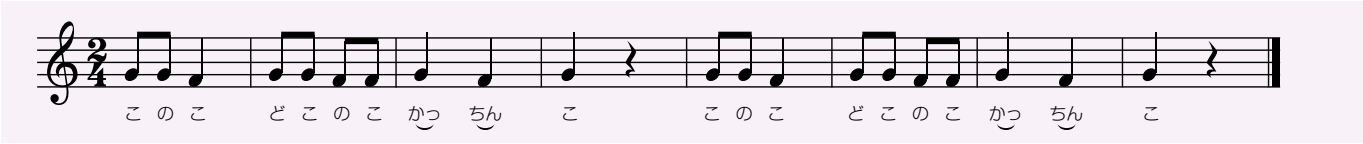
3　笑顔と言葉のやりとり

一人一人に寄り添って、笑顔が生まれるまでわらべ歌を繰り返し歌いましょう。

じーじーばぁ

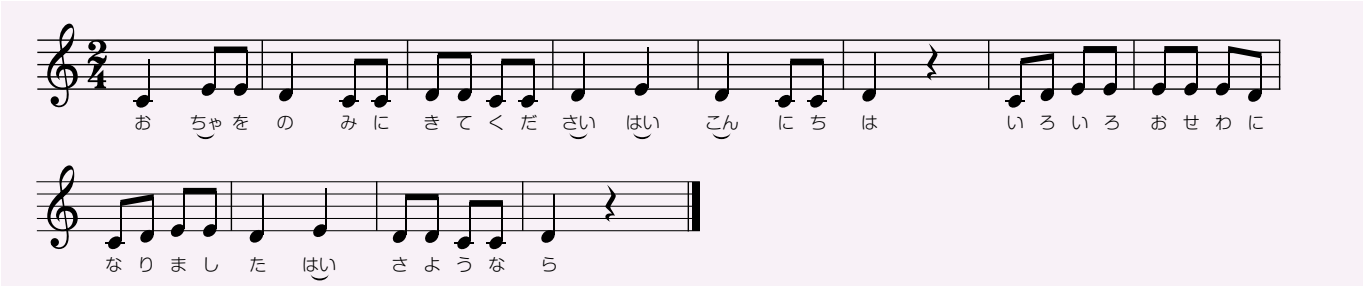
布を顔の前にたらし、「ばぁ」で布を下げて顔を出します。「ばぁ」で隠れている顔が出てくると、喜びます。何度も「じーじーばぁ」を繰り返してから、「チリンポロンととんでった」で布を飛ばします。障害の重い子供から楽しめます。

このこどこのこ



繰り返し歌いながら、子供の両手を取って、軽く左右に振ったり、手拍子を打ったりしてもよいでしょう。「かっちんこ」に、子供の名前を入れて歌うと、子供の心が動き、やりとりも生まれます。一人一人に丁寧に呼びかけましょう。

おちゃをのみにきてください



おはなし会の始めや終わりに歌うとよいでしょう。「はいこんにちは」と「はいさようなら」で、お辞儀をします。歌えない子供でもお辞儀をしてくれます。手を叩きながら歌っても、楽しい雰囲気を作ることができます。

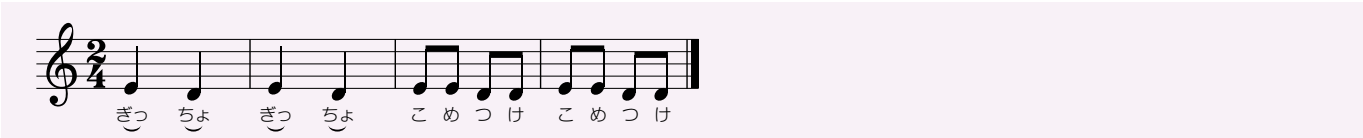
『いろいろおせわになりました　わらべうたの「おちゃをのみにきてください」より』

やぎゅうげんいちろう さく　福音館書店　978-4-8340-2313-8　楽譜あり

4　繰り返しの大切さ

おはなし会では、同じわらべ歌を繰り返し歌います。また別の日にも歌います。繰り返し歌っていると、子供たちに少しずつ変化が現れます。わらべ歌を期待し、積極的に楽しむようになります。見ているだけだったのが、手遊びに参加するようになります。だんだん自分のものになっていくのです。

ぎっちょぎっちょ



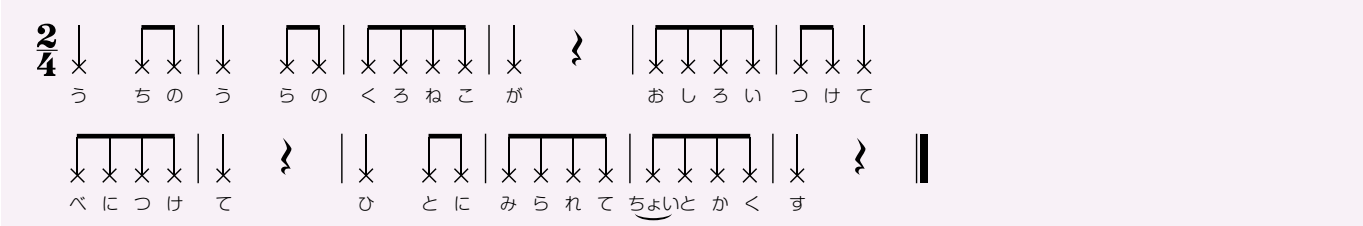
膝を叩いて、米をつく動作をします。単純な手遊びですが、だんだん速くしたり、またゆっくりしたり、手拍子を入れたり、変化を楽しむことができます。特別支援学校の小学部だけでなく、中等部や高等部など、どこの学校でも驚くほど喜ばれました。どんどん速くすると気持ちも高揚し、最後はああ疲れたと大満足の笑顔を浮かべた生徒もいました。

5　体を動かして全身で楽しむ

こどもかぜのこ

「こどもかぜのこ」で両手を交互に前につきだし、「じじばばひのこ」で両手を縮めて、寒さに震えてみせます。冬のわらべうたです。動作が簡単で、楽しく腕の伸び縮みができます。繰り返し歌いましょう。わらべ歌を通して、体を動かすことの気持ちよさを体験し、体も心も育ちます。

うちのうらのくろねこ



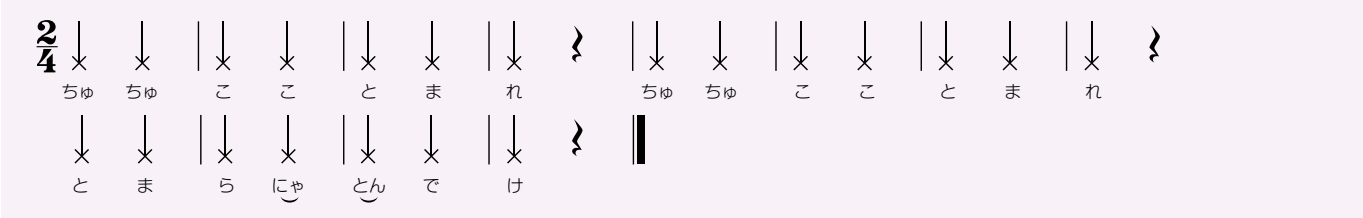
「うちのうらのくろねこが」で招き猫のように、両手を丸めて上下に動かします。おしろいを両頬につけ、口紅を引く動作をします。「ひとにみられて」で小手をかざして左右を見て、「ちょいとかくす」で両手で顔をおおい、少し間をおいてから顔を出します。ゆっくり何度も歌います。始めは、「ばぁ」のところだけ参加していても、繰り返しているうちに、他のところも楽しめるようになります。

6　人の声を聞く姿勢が育つ

子供はテレビやCDなど機械音にさらされがちです。わらべ歌では、目の前で、生の声で呼びかけられる心地よさを体験します。そこから言葉を聞く楽しさを知り、人の話を聞く力も育っていきます。

わらべ歌では、「どうぞ」と呼びかけて、歌い始めましょう。いっしょに歌う合図になるだけでなく、「どうぞ」を注意して聞く姿勢も育ちます。

ちゅちゅここと まれ

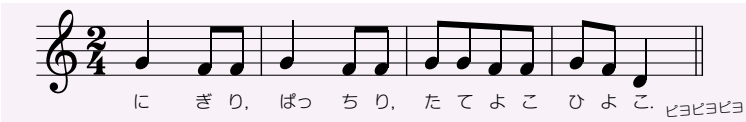


きれいな色の布やお手玉を使って歌うと効果的です。鳥のイメージで、歌に合わせて、布を上下させ、「とんでけ」で、子供の掌や頭、椅子の上などに止まらせます。「とんでけ」で、どこに飛んでいくだろうという興味を持って、布を目で追う子供もいます。何回か歌って、最後に布を空中に飛ばすと、布がひらひら落ちてくる様子を喜ぶ子供もいます。

7　疑似体験の楽しさ

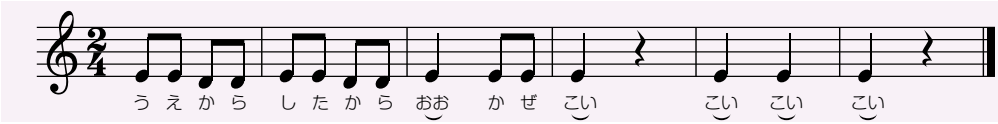
疑似体験をするわらべ歌があります。ごっこ遊びへと発展させることもできます。

にぎりぱっちり



布を丸めて手の中に入れ、左右に振りながら２回歌います。一拍置いて、ゆっくり両手を開くと、布がふわっと広がります。「ピヨピヨピヨ」と言いながら、見せて回ります。「かわいいね」「ヒヨコがうまれたよ」などと遊びます。「ヒヨコ」を「子イヌ」にかえて「ワンワン」と生まれたり、「カエル」が「ケロケロ」、「子ネコ」が「ニャーン」など子供の希望を聞いて、いろいろな動物を誕生させましょう。

うえからしたから



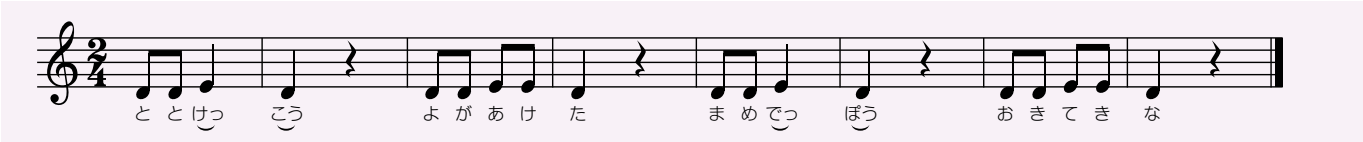
子供の顔に触れるように、歌に合わせて布を上下に振ります。布の感触に笑う子もいれば、びっくりする子など様々に、味わっています。始める前に、「大きい風と小さい風とどっちがいい？」と聞いて、子供の要望にそって、大きく、あるいは小さく布を振るといいでしょう。答えられない子供には「大きい風が行くよ」などと呼びかけて、期待を持たせ、歌いかけます。布の感触は、障害の重い子供には特に気持ちがよいのか、喜ばれます。

8　指人形を使って

指人形には、子供の心を開かせる力があります。指人形を持っていくと、どの子もとてもよい表情をします。

指人形を登場させるときには、袋に入れて、「この中で、誰かさんが寝ているよ。みんなで起こそうね」などと呼びかけて、わらべ歌を歌います。

ととけっこうよがあけた

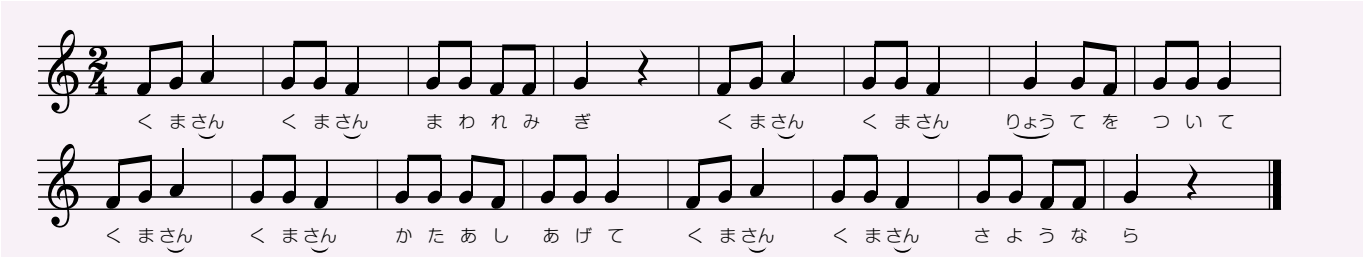


『**ととけっこうよがあけた**』（わらべうたえほん）　こばやしえみこ 案　ましませつこ 絵
こぐま社　978-4-7721-0177-6　楽譜あり

袋から出てきた指人形は、まず「こんにちは」と一人一人にあいさつをします。

クマの人形を使って、「くまさんくまさん」を歌います。

くまさんくまさん

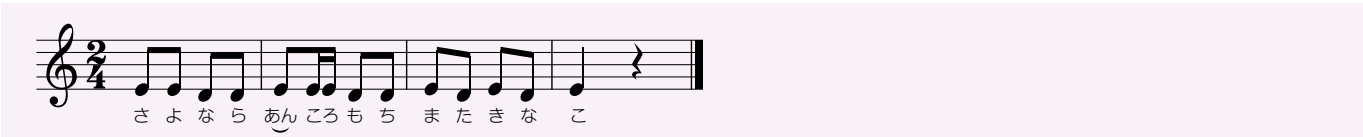


子供ができる簡単な手振りにして楽しむ方法もあります。おはなし会の最後に使って、「さようなら」で別れてもよいでしょう。

わらべ歌は、あいさつ代わりにおはなし会の始めに歌ったり、子供たちが読み聞かせに疲れた頃に、気分をかえるために歌ったり、最後に歌って盛り上げたり、いろいろな楽しみ方ができます。おはなし会に変化と流れが生まれるように工夫してください。

最後にこんな歌を歌うと、次のおはなし会を楽しみにする気持ちが生まれます。

さよならあんころもち



※ここにあげたわらべ歌は、『にほんのわらべうた　1～4』（近藤信子著　福音館書店　【セット】978-4-8340-3147-8）を参考にしています。実践事例付きで118のわらべ歌を掲載。楽譜とCDつき。

8 おはなし会のプログラム事例

1　重度・重複障害の子供向け

重度・重複障害の子供たちは、絵本を一人で楽しむことが難しく、読書経験が少ないことが考えられます。また、物語のストーリーを理解することが困難なこともあります。このような子供たちには、まず、「本を開くといろいろな楽しみに出会えるよ」と伝えられる絵本を選びます。食べ物、乗り物、動物など身近にあって、子供が興味を持ちやすいテーマのものがよいでしょう。

どの絵本もゆっくりと読みます。言葉や文を繰り返し読んでもよいでしょう。

●プログラム例

『くだもの』

平山和子 さく　福音館書店

『カニツンツン』

金関寿夫 ぶん　元永定正 え　福音館書店

わらべ歌 「にぎりぱっちり」

『サンドイッチサンドイッチ』

小西英子 さく　福音館書店

●おはなし会の時間　20分程度

最初に読む『くだもの』（➡p 10）は、みずみずしい果物の絵が描かれた、思わず手を伸ばしてしまうような絵本です。一人一人の目の前に絵本を持って行き、語りかけるように繰り返して読みます。参加者全員とやりとりを楽しみ、子供たちとコミュニケーションをとります。

次の『カニツンツン』（➡p 5）では、言葉の響きやリズムを全員で楽しみます。

読み聞かせの間にわらべ歌を歌うと、気分転換にもなり効果的です。自分で体を動かせない子供も多いので、布の動きを見て楽しめる「にぎりぱっちり」（➡p 55）を歌います。きれいな色の布を一人一人の前で見せて、繰り返しゆっくりと行います。

最後に簡単なストーリーのある絵本を入れるのもよいでしょう。『サンドイッチサンドイッチ』（➡p 19）は、どのページも短い文で、サンドイッチをつくるだけのストーリーです。一つの料理ができあがる、という達成感があります。昔話の『おおきなかぶ　ロシアの昔話』（➡p 32）を読み、カブが抜けた達成感を楽しむのもよいでしょう。

中学部や高等部になると、生活年齢に対して絵本が幼稚に感じられ、選ぶのに悩みます。例えば『カニツンツン』ならば、本を紹介するときに「作者は世界中の言葉を集めてこの本をつくったのですよ。」と、作成に関する話を一言付け加えるなど、工夫をするとよいでしょう。

読み聞かせが終わった絵本は、表紙を見せて立てて置きます。おはなし会終了後、子供たちと読んだ絵本を一冊ずつ確認することができます。また、子供が読みたい絵本を手に取って見ることもできます。

2　小学部向け

小学部では、読み聞かせをする前は、歩き回ったり、前に出てきて絵本を手に取ったり、まったく興味がなさそうに他の方向を見ていたりと、子供たちの様子は様々です。けれども、おはなし会が終わると、多くの子供がこちらに寄ってきて握手を求めたり、話しかけてきたりします。このような感性豊かな子供たちの興味・関心に応えるために、いろいろなタイプの絵本を選んでいきます。また、お話や絵本への理解力も子供によって違うので、この点にも気をつけます。

●プログラム例

わらべ歌 **「おちゃをのみにきてください」**

『ぱんだいすき』

征矢清 ぶん　ふくしまあきえ え　福音館書店

『きんぎょがにげた』

五味太郎 作　福音館書店

わらべ歌 **「うちのうらのくろねこ」**

『ちいさなねこ』

石井桃子 さく　横内襄 え　福音館書店

●おはなし会の時間　20分程度

最初に「おちゃをのみにきてください」（➡p 54）を歌って、子供たちの気持ちをこちらに引きつけます。「こんにちは。これから、おはなし会が始まるよ。」という合図です。

『ぱんだいすき』（➡p 17）は買い物の疑似体験と、好きなものを選ぶ、という楽しさを備えた絵本です。一人一人の前に持って行ってゆっくり見せます。「（そのパン）好き。」「（給食で）食べた。」など声をかけてくる子供もいます。同じ文章や構成が繰り返される絵本は、読み進めていくと、子供たちも「次は何かな」と期待をしながら楽しみ、絵本への関心をかき立てられます。

クイズが好きな子供が多いので、問いと答えでやりとりができる絵本を楽しみます。『きんぎょがにげた』（➡p 11）は絵の中から逃げた金魚を探します。

絵本の読み聞かせの間にわらべ歌「うちのうらのくろねこ」（➡p 54）を入れて気分転換をします。何度か繰り返して歌い、全員で体を動かしながら楽しみます。

わらべ歌に関連した絵本を読むのも効果的です。ここでは、「うちのうらのくろねこ」のわらべ歌に続けて、『ちいさなねこ』（➡p 21）を入れました。「それでは、ネコが主人公の絵本を読みますね。」と紹介して、読み始めます。

プログラムの中に１冊はストーリー絵本（創作物語絵本・昔話絵本）を入れて、お話の世界を体験させたいものです。ストーリー絵本を選ぶ際には、動物好きな子供が多ければ、動物が主人公の絵本を、電車が好きな子供がいれば、電車が出てくる絵本というように、子供の興味・関心に寄り添って選ぶのもよいでしょう。

3　中学部・高等部向け

小学部と同様に、本への親しみ、お話への理解度は様々です。子供たちの集中力を考えて、偏らずにいろいろなタイプ、テーマの絵本を選びます。普段はなかなか体験したり、目にすることのできない、新しい世界への扉を、ぜひ本によって開けてあげたいものです。

●プログラム例

『はらぺこあおむし』

エリック＝カール さく　もりひさし やく　偕成社

『あおむしくん』

久保秀一 写真　七尾純 文　偕成社

『世界のだっことおんぶの絵本　だっこされて育つ赤ちゃんの一日』

メリー＆ドゥルガ・バーナード 絵　仁志田博司、園田正世 監訳　メディカ出版

『よるのねこ』

ダーロフ・イプカー 文と絵　光吉夏弥 訳　大日本図書

●おはなし会の時間　30分程度

読んだ絵本に関連づけて、次の絵本を紹介していく方法があります。おはなし会に一つの流れをつくり、子供の興味を引きつける工夫です。

「今日は最初に、皆さんもよく知っている本を読みます。」と言って、『はらぺこあおむし』（➡p 23）を紹介します。長い間子供たちに親しまれ、よく知られた絵本で、子供たちの関心を引きつけます。

その次は、中学部や高等部らしく、もう少し事実を深められるように、アオムシの誕生からチョウへの羽化を写真で追った『あおむしくん』（➡p 42）を読みます。すべての文章を読むのではなく、ポイントを説明するだけでもよいでしょう。

虫のあかちゃんの後は人間のあかちゃん、ということで『世界のだっことおんぶの絵本』（➡p 52）を紹介します。

知識の絵本が２冊続いたので、最後にストーリーのある絵本を読みます。『よるのねこ』（➡p 31）は、『世界のだっことおんぶの絵本』の終わりに、あかちゃんは夜になると朝まで眠ると書かれているので、その逆の、「夜に歩き回るネコの話です。」と紹介してから読みます。

昔話もおすすめです。例えば、『世界のだっことおんぶの絵本』の見開きの世界地図を見せ、「世界中を回ったので、最後は日本の昔話を読みます」と、『ずいとんさん』（➡p 35）を読むのもよいでしょう。

中学部や高等部でも、読み聞かせの途中に、わらべ歌を入れることも可能です。「長い間日本の子供たちの間で伝えられてきた遊びを体験してみましょう。」と前置きをするなど、上手に紹介します。「ぎっちょ　ぎっちょ　こめつけ　こめつけ」は動作を工夫すれば、大変喜ばれます。

Ⅲ　聴覚障害の子供たちへの読み聞かせ

都立多摩図書館では、８年間にわたり、ろう学校の小学部や幼稚部で、読み聞かせや科学遊び、ブックトークを行ってきました。その経験をもとに、聴覚障害の子供たちへの読書支援について紹介します。

聴覚障害の子供たちは、好奇心にあふれ、知りたいという意欲がとても高く感じられます。絵本の読み聞かせも驚くほど集中して聞いています。それだけに理解できた時には、喜びも大きく、友だち同士で確認したり、自分の発見を伝えあったり、楽しさをわかち合えるおはなし会になります。

読み手としては、声、口の形、手話、指文字、ジェスチャーなどを適切に組み合わせて、子供たちをお話の世界へと案内します。子供たちの障害の程度は様々ですが、最も聞こえのレベルの低い子供に合わせて、どの子も楽しめるように読みます。おはなし会では、その場にいる子供たちや先生方に学びながら、工夫するとよいでしょう。

聴覚障害の子供も健聴の子供も絵本の楽しみ方は、変わりなく、選び方においても相違はありません。ただし、主に音の響きを楽しむ絵本は、楽しさが伝わりにくいので、避けたほうがよいでしょう。

『めっきらもっきらどおんどん』（長谷川摂子作　ふりやなな画　福音館書店）は、主人公のかんたが歌うおかしな歌や登場人物のユーモラスな名前に不思議さを感じますが、なかなかその面白さを伝えることはできません。『もこもこもこ』（➡ｐ７）のように、擬音を楽しむ絵本もふさわしくありません。

1　絵本の読み聞かせ方

読み手が手話やジェスチャーなどをするので、読み聞かせには、絵本の持ち手が必要です。持ち手は、本を持つだけでなく、状況によっては、絵を指したり、一人一人に見せて回るなど、読み手と一体となって読み聞かせを行います。

子供たちは、読み手の手話や指文字を見ることと、絵を見ることを同時にはできません。まず場面を見せて予備知識を与えます。十分見たところで、読み手は身を乗り出したり、手を絵本の前に出すなど、子供たちの視線を集めてから、読み始めます。読み終わったら、再び同じ場面を見せて、今、聞いたことを確認させます。物語がクライマックスを迎えると、先を急ぎたくなりますが、何より丁寧に読み進めることを心がけましょう。慣れてくると、聞き手、読み手、持ち手の間に一種のリズムができて、絵本の楽しみを共有する感覚が生まれます。通常の読み聞かせより倍近く時間がかかることを予定しておきましょう。

子供たちの聞こえの状態は様々なので、しっかりした声でゆっくりと読みながら、手話や指文字、必要に応じて絵本の絵を使って説明したり、ジェスチャーを加えたり、できるだけ理解を助けるように工夫します。

絵本の絵は、最も雄弁にストーリーを物語っているので、絵を上手に使うと効果的です。

『はじめてのおつかい』

筒井頼子 さく　林明子 え

福音館書店　978-4-8340-0525-7　★★

５歳のみいちゃんは、忙しいお母さんに頼まれて、初めて一人で牛乳を買いに行きます。途中で友だちに会って話したり、怖そうなおじさんに出会ってどきどきしたり、駆けてころんだり。やっと店につきますが、お店の人は小さなみいちゃんに気付いてくれません。とうとう大声で「ぎゅうにゅうくださあい」と叫んで、無事おつかいができました。大型絵本を使うと、細かいところが見えるので、効果的です。

子供は、とても興味を持って聞きます。みいちゃんが歩いていく様子がすべて絵に描いてあるので、絵本を上手に使って読みます。例えば、みいちゃんがころんで、100円玉が転がっていく場面では、読み手がみいちゃんになって、転んで、お金を探す様子を演じると、子供たちは、草の影に隠れたお金に気づいて、先を競って指さします。

文章通りに読むと意味がわからなくなるところは、言葉の順番や表現をかえ、時には省略して読みます。原作の味わいをなくさないように、またその後、子供が一人読みをしたときに手助けとなるように配慮して言いかえます。

『**どろんこハリー**』（➡p 24）には「にかいへむかって、いちもくさん」という文章があります。健聴の子供は、「いちもくさん」という言葉を知らなくても、音の響きや前後のつながりで意味を類推し、耳慣れない言葉を新鮮に感じることができます。しかし聴覚障害の子供は、読み聞かせで知らない言葉に出会っても、意味を類推することは難しいでしょう。「いちもくさん」を「大急ぎ」に言いかえるとスムーズに物語を追うことができます。

同様に、間接話法での表現も、伝えるのが難しいときがあります。『どろんこハリー』でも、「もっといっぱいあそびたかったけど、うちのひとたちに、ほんとにいえでしたとおもわれたらたいへんです」という文章では、そのページには描かれていない「うちのひとたち」の考えを書いています。このような場合は「ハリーは、もっと遊びたいと思ったけれど、家に帰ることにしました」のように思い切って単純化します。また、主語が抜けた文章には、必ず主語を補うようにします。主語の該当人物が描かれていたら、その人物を指さしてから、読み始めるとわかりやすくなります。

特に幼児には、絵に描かれていない人物を想像するのは難しい場合があります。『**おおかみと七ひきのこやぎ**』（➡p 33）で、オオカミが子ヤギの家の戸をたたいて、「戸をあけておくれ」と呼びかけますが、その場面では子ヤギの絵は描かれていません。子ヤギたちが戸の向こうにいて、オオカミと話していることがわかるように、子ヤギの絵をコピーして戸の向こう側に置いてみせるとわかりやすくなります。何回か見せれば、補助の絵がなくても理解できるようになります。

幼稚部から指文字を自由に使いこなすので、少し難しくても、お話のキーワードになる言葉や固有名詞は、まず指文字で表現します。『**ひとまねこざるときいろいぼうし**』（➡p 63）なら、始めに「じょーじ」と指文字で示し、その後はサルの手話と「じょーじ」の口話で表していきます。『**ハンダのびっくりプレゼント**』（➡p 65）には、グアバ、ドリアンなど聞き慣れないアフリカの果物が出てきます。

子供たちは好奇心旺盛なので、知らない果物の名前を指文字でしっかり伝えると、興味をもってくれます。

絵本の文章を安易に変えるのは問題ですが、まず内容を伝え、絵本の楽しさを体験することを優先させたいと思います。

2 繰り返しのある絵本

幼稚部では、同じパターンが繰り返される絵本がお勧めです。繰り返しは、先への予想ができ、期待通りの展開に喜び、安心して聞くことができます。また子供たちが読み聞かせに参加できることも魅力の一つです。

『**もうおきるかな？**』（➡p 15）を読み聞かせた時には、子供たちは、読み手といっしょに手話をしながら、楽しんでいました。イヌ、ネコ、リス、クマ、ゾウなど、どれもよく知っている好きな動物なので、子供もすぐに参加することができます。

『**くまさんくまさんなにみてるの？**』（➡p 16）は、「あおいうま」や「むらさきいろのねこ」など、思いがけない色の動物が登場します。あるろう学校の幼稚部で読んだときに、「あおいうまをみているの」というせりふの後、少し待って、児童たちの期待を高めてから、ぱっとページをめくりました。期待どおり「あおいうま」が現れ、児童たちの目を引きます。これを繰り返していると、読み手と児童たちの間に、1冊の絵本を通して、話をしているような気持ちが生まれます。最後のページでは登場した動物がみんな並びます。ここを全員で声を合わせて読むと、児童たちは満足したようでした。

Ⅲ

『しろ、あか、きいろ』

ディック・ブルーナ ぶん・え　松岡享子 やく

福音館書店　978-4-8340-0960-6　★

女の子が白いシャツを着て立っています。「くつしたは、あか。」の文章では、女の子が赤い靴下をはいています。次は黄色いシャツ、赤いスカートと服を身につけていきます。どのページでも女の子が同じポーズで立っていますが、そこの文章に書いてある服だけに色がついています。最後は、全部の服に色がついた女の子が立っています。

幼児がよく知っている色と身につけるものを取り上げています。真ん中と最後のページには、それまでに着た服が再度登場します。この場面では、「きいろいりぼん。きいろいぶらうす」と女の子の絵を指さしながら、子供たちと一緒に手話で読むことができます。

あるろう学校の幼稚部で読んだときには、ほかの本を楽しめなかった重複障害の児童が、生き生きと楽しんでいました。

『わたしのワンピース』

にしまきかやこ えとぶん

こぐま社　978-4-7721-0018-2　★

ウサギが空から落ちてきた白い布でワンピースを作りました。そのワンピースを着て、花畑を散歩すると、ワンピースは花模様に、雨が降ると水玉模様にと次々変わります。朝、ウサギが目を覚ますと、ワンピースは星の模様になっていました。

あるろう学校の幼稚部で読んだとき、児童たちはワンピースが水玉模様になると「雨のにおいがする」、草の実模様では「いいにおい」など本に鼻を付けて、熱心ににおいを嗅いでいました。別のおはなし会では一人の児童がワンピースを着ていたので、これがワンピースと紹介しました。たまたまその児童のワンピースが星の模様だったので、最後の場面には、本人も周りも大喜びしました。するとほかの児童たちも星のついた靴下を見せたり、上着をめくってシャツについている星のマークを見せたり、にぎやかなおはなし会になりました。

3　絵が物語る絵本

子供たちは、絵からおはなしを読み取ることがとても上手です。絵がお話を物語っている絵本は、先を予想しながら集中して聞きます。友だちともお話を共有できるので、盛り上がります。

『ひとまねこざる』のシリーズや『よかったねネッドくん』、『わゴムはどのくらいのびるかしら？』、『ハンダのびっくりプレゼント』など、どんどん先を予想できる絵本は、どの子も積極的に関わることができます。聴覚障害が重い子供たちのためにも、プログラムの中にこのような絵本を意識して取り入れるとよいでしょう。

『ひとまねこざるときいろいぼうし』

H.A.レイ 文、絵　光吉夏弥 訳

岩波書店　978-4-00-115147-3　★★

アフリカからやってきた子ザルのじょーじは、とてもしりたがりや。カモメのまねをして船から落ちたり、電話をいたずらして消防車を呼んで、牢屋に入れられたり。でもいつも仲良しのきいろいぼうしのおじさんが助けてくれます。

小学部の３、４年生に読むと、どのろう学校でも喜ばれました。じょーじが船の舳先に立って、カ

モメのように飛ぼうとしている場面では、先を読み取り、予想通り海に落ちる様子がおかしくて、大笑いしていました。特に男の子たちが、笑いが止まらなくなって、顔を見合わせては何度も吹きだしていました。長い話なので、時間がないときには、ストーリーをかいつまんで読んでも楽しめます。

『わゴムはどのくらいのびるかしら？』

マイク・サーラー ぶん　ジェリー・ジョイナー え
きしだえりこ やく
ほるぷ出版　978-4-593-50402-2　★★

ある日、坊やが、輪ゴムはどのくらい伸びるか試そうとして、輪ゴムをベッドに引っかけ、端を持ったまま外に出ていきます。自転車に乗り、バスに乗り、どんどん先へ行って、月まで飛び、地面に降りようとした途端、輪ゴムがはじけて、ベッドに落っこちました。

小学部の低学年では、輪ゴムを見せて、どのくらい伸びるかしらと呼びかけて始めると、こんな不思議な輪ゴムがあるのかなと真剣に聞きます。輪ゴムがはじけることを予想して、痛そうな顔をしている児童もいました。

高学年では、ストーリー絵本（創作物語絵本・昔話絵本）の後の息抜きとして楽しめます。幅広い年齢に受け入れられる絵本です。

Ⅲ

『よかったねネッドくん』

レミー・シャーリップ ぶん・え　やぎたよしこ やく
偕成社　978-4-03-201430-3　★★

パーティに招待されたネッドくんが、飛行機に乗ると、エンジンが故障。でもパラシュートで脱出。ところがパラシュートには穴があいていて…と次々に災難にあいますが、その度に幸運にも危機をのり越えます。「よかった！」「でも、たいへん！」がページをめくるたびに交互に現れます。最後は無事誕生パーティに到着。

小学部の高学年に読み聞かせると、災難と幸運が交互に訪れることがわかってきて、先を期待して聞いています。友だちと驚きや笑いを共有しながら楽しんでいました。乾草の山に突き刺さったフォークは、絵も小さいので、指さすとわかりやすいでしょう。

『ハンダのびっくりプレゼント』

アイリーン・ブラウン 作　福本友美子 訳

光村教育図書　978-4-89572-651-1　★★

ハンダが７つの果物を入れたかごを頭の上に乗せて、友だちの家に歩いていきます。その道中、動物がこっそり現れて、次々と果物を食べてしまいます。最後に偶然、かごにミカンがたくさん落ちてきて、それが友だちへのプレゼントになります。

文章は、動物たちの行動には触れず、もっぱらハンダのことを書いています。絵だけが、ハンダの身に起こっていることを語っています。あるろう学校の小学部高学年に読んだときには、「どうしてハンダは気づかないのだろう。かごが軽くなるのに」と言っている児童もいました。低学年には、最後のミカンがかごに落ちてくる事件がよくわかるように、その場面をじっくり見せるとよいでしょう。

4　昔話絵本

小学部の高学年では、起承転結がある本格的な昔話が喜ばれます。子供たちは昔話を知っているようで意外と知りません。起承転結のはっきりした昔話は、読書体験の少ない子供にとっても、話が具体的で大変理解しやすいです。起こった事件や事実だけを述べ、登場人物の感情を交えない叙述が昔話の特徴です。聞き手は主人公になりきって聞き、勇気、成功の喜び、嫉妬心など様々な感情を体験することができます。

昔話は、普段使わない物が出てきたり、昔話の語り口を生かした文章で書かれています。事前に知らない言葉を説明したり、ストーリーはそのままで、わかりやすい文章にかえるなど工夫します。その場で適当にかえるのではなく、事前に原稿を作り、昔話を損ねていないか、聞きやすいかなど充分に検討しておきます。

『くわずにょうぼう』

稲田和子 再話　赤羽末吉 画

福音館書店　978-4-8340-0789-3　★★

昔、よくばり男が飯を食わないという女房をもらいます。ところが米俵が減っているので、男がこっそりのぞくと、女房は握り飯を作り、頭のてっぺんの大きな口で食べていました。男が出ていくように言うと、女房はおにばばになって、男を桶に入れて山へ向かいます。男は何とか逃げ出します。おにばばは追いかけてきますが、ヨモギとショウブが男を守ってくれました。

あるろう学校の小学部高学年に『くわずにょうぼう』を読んだときには、始めに「食わず」と「女房」の意味を説明しました。「とんとん　むかしが　あったそうだ。むかし、うんと　よくばりのおとこが　ひとりで　すんでいたそうだ。」という冒頭の文章は「昔、とても欲張りな男が一人で住んでいた」と読みかえました。児童たちはしっかりとストーリーについてきました。

おにばばが髪をほどいて、頭についている口を出し、握り飯を食う場面では、本当に驚いたという様子で、友だち同士で確認していました。また、ヨモギの毒にやられて、溶けてしまう最終場面は、おにばばが見えるような、見えないような微妙な絵が描かれています。その絵に顔を寄せて、じっと観察して、やっと納得したという様子で、友だちにも「見て見て」と勧めている児童もいました。クラスが一体になって絵本を楽しむことができ、昔話の力を再認識しました。

『うまかたやまんば』

おざわとしお 再話　赤羽末吉 画

福音館書店　978-4-8340-0809-8　★★

昔、馬方が山道でやまんばに襲われ、荷物の魚と馬を食われてしまいます。馬方は、一軒の家に逃げ込みますが、そこはやまんばの家でした。やまんばは帰ってくると、餅を焼いたり、甘酒を温めたりします。馬方はこっそり餅を食べ、甘酒を飲みますが、最後にやまんばをだまして、殺してしまいます。

冒頭からすぐに事件が起こり、馬方がやまんばに追われます。始めは魚を、次に馬の足を１本ずつと食われていく場面を子供たちはドキドキして聞いています。特に足を切られても「三ぼんあしのうまで、がった　がった　がった」と逃げるところでは、びっくりします。梁(はり)に隠れた馬方が、上からやまんばを見下ろす場面では、絵本の向きを変えて、縦長に描いています。絵が的確で、状況がわかりやすく、読み聞かせに向いています。

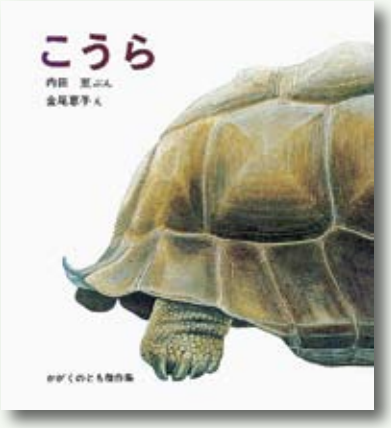
5 知識の絵本

事実を記述している知識の絵本も聴覚障害の子供たちの読み聞かせに向きます。特に、イラストや写真が優れている絵本では、それを上手に使って、わかりやすく読み聞かせることができます。

『こうら』

内田至 ぶん　金尾恵子 え
福音館書店　★★

今から１億年前、恐竜の時代に生きていたカメは、ゾウと同じくらい大きかったのです。今も生き残っているカメはみな甲羅を持っていて、甲羅は身を守るのに役立っています。

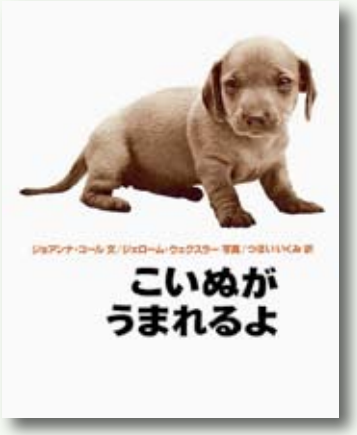


『こうら』は、カメの甲羅の仕組や役割を取り上げた絵本です。冒頭で、ウミガメが恐竜と泳いでいる姿に、子供たちは大きな驚きと興味を持ちます。ゾウと大昔に生きていたウミガメが同じ大きさであることをイラストでわかりやすく説明しています。

『こいぬがうまれるよ』

ジョアンナ・コール 文　ジェローム・ウェクスラー 写真
つぼいいくみ　訳　福音館書店　978-4-8340-0912-5　★★

お隣の家の犬があかちゃんを産みました。「わたし」が１匹もらうことになっています。あかちゃんは袋をかぶって生まれてきました。お母さんは、へその緒をかみきって、袋を破ってあかちゃんをきれいにします。子犬は目も耳もふさがっていて、おっぱいを飲んで寝ているだけ。だんだん大きくなり、２か月たって歩けるようになりました。これからは「わたし」といつもいっしょです。



モノクロの写真で、犬の出産から、２か月間の成長を丁寧に追っています。あかちゃんが袋に入って生まれてくることや目や耳がとじていることに、子供たちはびっくりします。本を手元に引き寄せてじっと見つめる子供や友だち同士で確認する子供など、みな興味を持ちます。モノクロ写真なので、出産の場面も生々しい血の色が見えずに、落ち着いて見ることができます。多くの子供が興味を持ちますが、中には「怖い」と反応する子供もいました。

6 わらべ歌

幼稚部や小学部の低学年のおはなし会では、わらべ歌を取り入れると、気持ちが開放的になり、読み手にも心を開いてくれます。また、子供にとって集中を要する読み聞かせは、時には疲れることもあるので、プログラムの間に体を動かす「うちのうらのくろねこ」（➡p 54）のようなわらべ歌を入れると、気持ちを切り替えることができます。子供たちはわらべ歌を聞くと、すぐに、リズムをとって、上手に体を動かしてくれます。

指人形もとても喜ばれます。あるろう学校の小学部３年生のクラスに行ったときに、児童から「くまさんは？」と聞かれたことがあります。前の年に会ったクマの指人形を覚えていたのでしょう。

指人形は、指人形を動かして話をする人と、それを手話で見せる人の２人１組で演じます。

まず袋の中から「ととけっこう　よがあけた」（➡p 56）と歌って、クマさんの指人形を登場させます。子供一人一人の前に持って行って、「こんにちは」とあいさつをすると、「こんにちは」とまじめにあいさつしたり、うれしそうになでたり、抱きしめたりします。それから「くまさんくまさん」を歌います。指人形の隣で、歌に合わせて体を動かすと、子供たちもすぐに覚えて、一緒に体を動かしてくれます。繰り返し歌うとだんだん上手になります。その後、クマの登場する『くまさんくまさんなにみてるの？』（➡p 16）を読み聞かせると流れがスムーズになります。

7 ブックトーク

学校などで行われるブックトークは、クラス、学年など集団の子供たちに対して、決められた時間内に、本を手際よく紹介することです。魅力的なタイトルを付け、そのテーマに添って、子供たちの興味や読書力を考えて幅広く本をそろえます。本の一部を読んだり、あらすじを紹介したり、写真や絵を見せたり、子供たちの読みたいと言う気持ちを引きだします。

聴覚障害の子供たちは、耳からの情報が入りにくいので、ブックトークで本の面白さを具体的に伝えることはとても効果があります。絵本や挿絵の多い低学年向けの物語は絵を見せながら紹介します。また知識の本も写真や絵を用いて説明できます。しかし、高学年向けの物語は挿絵も少なく、言葉だけで内容を伝えるのは、難しさを感じます。

またどの本も途中まで紹介して、「その先を知りたい人は読んでください」では、子供たちが欲求不満になります。絵本の読み聞かせを入れたり、あらすじを最後まで紹介するなど、本の楽しさを体験させる方に重点を置くとよいでしょう。ブックトークが終わったら、紹介した本を自由に読めるように用意しておきます。

ブックトークはろう学校の小学部の中学年と高学年を対象に行ってきました。読書に苦手意識のある児童も多いので、対象学年よりやさしい本を紹介しています。

1 「動物だいすき」　小学部中学年対象

導入　皆さんは、動物が好きですか？　今日は、動物の本を紹介します。

読み聞かせ　**『こいぬがうまれるよ』**（➡67）

ジョアンナ・コール 文　ジェローム・ウェクスラー 写真　つぼいいくみ 訳　福音館書店

つなぎの言葉　子犬がどんなふうに生まれるかわかりましたが、ほかの動物はどうでしょうか？

内容紹介

『どうぶつフムフムずかん』

マリリン・ベイリー 文　ロミ・キャロン 絵　福本友美子 訳　玉川大学出版部

「おとうさんのこそだて」をひらいて

ここは熱帯の海です。これはタツノオトシゴです。膨らんだおなかの穴から、あかちゃんが出てきました。あかちゃんを産んでいるから、お母さんだと思いますか？　これはお父さんです。タツノオトシゴのお母さんはお父さんのおなかにタマゴを産みます。タマゴがあかちゃんにかえると、お父さんのおなかの袋の中で大きくなります。おなかの中には何百匹も子どもがいます。生まれるとすぐに一人で泳げます。

「たまごのすりかえ」（カッコウの子育て）、「海のなかよし」（クマノミとイソギンチャクの共生）、「ドングリかくそう」（キツツキのドングリ貯蔵法）を紹介します。

この『どうぶつフムフムずかん』には、いろいろな動物の暮らしや子育てについて書いてあります。

１ページずつに一つの動物について書いてあります。好きなところから読めます。みんなびっくりするようなお話です。

つなぎの言葉　動物たちがとても賢いということがわかりました。では一番賢い動物はなんだと思いますか？　人間？　サル？　次に紹介するのは、サルの本です。

ダイジェストで読む

『ひとまねこざるときいろいぼうし』（➡63）　H.A.レイ 文絵　光吉夏弥 訳　岩波書店

このサルは皆さん、知っていますか？　ひとまねこざるのじょーじです。

じょーじはアフリカに住んでいました。じょーじはとても知りたがりやです。毎日楽しく暮らしていました。ある日、じょーじは黄色い帽子をかぶった男の人を見ました。（中略）車に乗って動物園へ。じょーじは動物園で楽しく暮らしました。

じょーじの本は全部で、６冊あります。どの本もとても面白いので、読んでみてください。

ダイジェストで最後まで読み聞かせます。

つなぎの言葉　動物園にはサルだけではなくいろいろな動物がいます。

内容紹介

『どうぶつのあしがたずかん』　加藤由子 文　ヒサクニヒコ 絵　岩崎書店

『どうぶつのあしがたずかん』では、動物園のいろいろな動物の足型を紹介しています。

（ゾウの足形を見せて）　これはどんな動物の足形かわかりますか？　インドゾウの左前足です。本当の大きさです。39cmあります。

キリン、カバ、クマ、パンダなど、クイズを出しながら、紹介します。

この本には、そのほかにもいろいろな動物の足形が紹介されています。動物の足は、その動物が生きるのに便利にできていることがわかりましたね。

ゴリラ、チンパンジー、ニホンザルの手形に子供たちの手を重ねて、大きさと形の違いを実感して楽しめます。

2「いただきまーす」　小学部高学年対象

導入　もうすぐ、給食ですね。今日のご馳走は何かな？　楽しみですね。給食を待つ間、「いただきます」をテーマに本を紹介します。

内容紹介

『火曜日のごちそうはヒキガエル』　ラッセル・E.エリクソン 作　佐藤涼子 訳　評論社

皆さんはどんなご馳走が好きですか？　お寿司？　ハンバーグ？　カレーライス？　それともカエル？（本を出し、表紙を見せて）『火曜日のごちそうはヒキガエル』、このミミズクは、ヒキガエルを食べようと思っています。それもお誕生日のご馳走に。でもカエルは、そんなのいやだと思っています。カエルの名前はウォートンといいます。ウォートンは、（ｐ５を見せながら）兄弟のモートンと仲良く暮らしています。ウォートンはそうじが好きで、いつも家をきれいにしています。モートンは料理が好きで、

いつもおいしいご馳走を作っています。今もテーブルの上には、モートンが作ったカブトムシの砂糖菓子が乗っています。最高においしいカブトムシの砂糖菓子。ウォートンはこのおいしいお菓子をおばさんに持って行ってあげたいと言いました。でも今は冬。外は雪が積もって、とっても寒い。ヒキガエルが雪の上を飛び跳ねていくことはできません。ウォートンは考えているうちにいいことを思いつきました。服を何枚も何枚も着て暖かくして、スキーで滑っていくのです。

絵を見せながら、ウォートンが途中でミミズクにつかまり、６日間ミミズクの家で過ごさなくてならないこと、その間に２匹がお茶を飲んで仲良くなるまでを紹介します。

ウォートンは、本当にミミズクに食べられてしまうのでしょうか？　それとも逃げ出すことができるでしょうか？　知りたい人は続きを読んでください。この「火曜日のごちそうはヒキガエル」は続きが６冊あります。どれも愉快なお話ばかりです。

つなぎの言葉　モートンが作ったカブトムシのお菓子、おいしいかな？　皆さんはムシパンを食べたことがありますか？　虫が入っているパンではなく、蒸したパンです。

絵本の紹介

『ばばばあちゃんのなぞなぞりょうりえほん　むしぱんのまき』

さとうわきこ 作　福音館書店

ばばばあちゃんの料理絵本シリーズから、『ばばばあちゃんのなんでもおこのみやき』『ばばばあちゃんのアイス・パーティ』『ばばばあちゃんのやきいもたいかい』『ばばばあちゃんのおもちつき』『よもぎだんご』を季節に合わせて、紹介します。

つなぎの言葉　みんながご馳走を食べているのに、食べないと言う人がいます。

読み聞かせ　**『くわずにょうぼう』**（➡p 65）　稲田和子 再話　赤羽末吉 画　福音館書店

内容紹介　**『手で食べる』**　森枝卓士 文・写真　福音館書店

もし、皆さんがおうちで、こんな食べ方をしたら、お父さんやお母さんにお行儀悪いと叱られるかな？（ｐ２を指差しながら）手づかみで食べたり、胡坐をかいたり、片足を立てたり。お行儀悪い？　悪くない？（ｐ４を見せながら）手で食べている人たちがいます。これはちっともお行儀悪くありません。

世界では、箸やスプーン、手などいろいろな方法でお米を食べること、米の種類の違い、欧米の人たちの食べ方の歴史、手を使った食べ方などを紹介します。

この本には、世界中でどんな食べ物をどんな方法で食べているかが書いてあります。もっと詳しく知りたい人は、読んでください。

Ⅳ　視覚障害の子供たちへの読み聞かせ

視覚に障害のある子供たちに絵本を読み聞かせるには、多くの配慮が必要です。絵によってお話がすすむ絵本が多いこと、また子供たちの障害の程度がそれぞれ異なり、どのような絵が見えやすいか、個人差があるからです。

複数の子供たちがともに楽しむには、絵本の読み聞かせよりストーリーテリング（お話）が最適です。ストーリーテリングとは、語り手が、お話を覚えて、直接聞き手に語ることです。図書館では子供たちに本の面白さを知らせ、読書に導くことを目的に、昔話や創作物語などを語って聞かせるストーリーテリングが広く行われています。

都立多摩図書館では、８年間にわたり、盲学校の寄宿舎で小学校３年から中学３年までの児童・生徒に、ストーリーテリングを行ってきました。その経験をもとに、視覚障害のある子供たちが楽しめるお話やおはなし会について紹介します。

1　子供たちはお話が好き

子供たちは、ストーリーテリングをとても楽しんで聞きます。一言一言の言葉をしっかり受け止め、高い集中力と注意力を持って聞いています。お話を細部にわたって楽しみ、時には語り手も気がつかなかったことに気づいて、笑ったり、質問をしたりします。語り手は、子供たちから力をもらって、共にお話の世界を楽しむことができます。

お話を聞くときに、語り手の顔を見る子供は少なく、ほとんどはうつむいたり、横を向いたりしています。初めて語るときには、視線が合わないことに不安を覚えるかもしれませんが、それぞれ聞きやすい姿勢で聞いているのです。横を向いて、聞いていないように見えて、聞いているので安心して語りましょう。

ストーリーテリングでは、昔話や短い創作物語を語りますが、何と言っても一番喜ばれるのは昔話です。元来、昔話は、世界各地で世代から世代へ語り伝えられてきたものです。ストーリーも表現も、耳から聞いて楽しめるようにできています。

ストーリーテリングは、覚えるにも、語れるようになるにも時間がかかるので、昔話などを読んで聞かせることをお勧めします。お話を心に描きながら読むと、読み手のイメージが、直接聞き手に届きます。身近な大好きな大人に読んでもらうことは、子供にとって大きな喜びとなります。

同じ昔話でも、様々なテキストがあるので、十分に吟味して選んでください。民族が長年伝えてきた昔話を安易にかえていないか、耳で聞いて楽しめるか、表面的なお説教や教訓を押しつけていないかなど、実際に声に出して読んで確認するとよいでしょう。

2　言葉のリズムや歌を楽しむお話

子供たちは面白い唱え言葉やリズミカルな歌に敏感に反応します。すぐに覚えてしまい、お話が先へ進んでも、いつまでも繰り返し歌っている子供もいます。おはなし会のプログラムには、唱え言葉

や歌が入っているお話を意識して入れるとよいでしょう。

井戸でカニを育てているじいさんが、『かにかに、こそこそ』と呼ぶとカニが出てくるお話では、この「かにかに、こそこそ」が唱えられると、子供たちの注意が集中するのがわかります。

『鳥のみじい』では、小鳥を呑みこんだじいさんが、鳥のしっぽを引っ張るたびに「あやちゅうちゅうこやちゅうちゅうにしきさらさら・・・」と小鳥が歌います。お話を集中して聞けない子供も、小鳥の歌だけは、耳を澄まして聞いていました。

歌のあるお話も歓迎されます。『ヤギとライオン』では、ライオンに食べられまいとして必死に歌うヤギの声に引き込まれて聞いていました。『ヤギとライオン』や『金色とさかのオンドリ』では、同じ歌が繰り返されるので、そのたびに期待感が高まり、楽しみが増します。

3 ユーモラスなお話

子供たちはおもしろいお話が大好きです。

『ホットケーキ』は、お母さんが焼いたホットケーキが逃げ出して、次々と出会う動物たちを見事にだまして転がっていく話です。「オジサンポジサン」「メンドリペンドリ」などホットケーキの生意気なセリフが面白くて、子供たちは笑って聞いていました。そのセリフが繰り返していくに従い、どんどん長くなっていくので、おかしさが増幅していきます。終わった後で、中学部の男子生徒が「こういうお笑いが好き」と言っていました。

「ここから北へ北へと進んでいったある南の国に」など、反対の状況を大まじめに語った『あくびがでるほどおもしろい話』も喜ばれます。始めは内容がつかめず、キョトンとしていても、話の仕組みがわかってくると、語り手が次の言葉を言うか言わないうちに、待ちかねたように大笑いをしていました。

ユーモラスな話でなくても、ちょっとした場面の機微から生じたおかしさを見つけ出すことも上手です。

『やまんばのにしき』は、赤ん坊を生んだやまんばに、山の麓に住むばんばが餅を届ける話です。やまんばは、クマのすまし汁に餅を入れて、ばんばに御馳走しようとします。そして生まれたばかりの赤ん坊にクマをとってこいと言いつけます。赤ん坊は「すぐくまをぶらさげてかえってきたと」と話すと、小さな赤ん坊が大きなクマをぶら下げてくる場面のおかしさに気付いて、吹き出したり、驚いたりします。

『ふしぎなたいこ』は、げんごろうさんが不思議な太鼓をたたくと、鼻がどんどん伸びていく話ですが、その場面のおかしさを想像しながら、楽しそうに聞いています。

『ありこのおつかい』では、アリのありこがお使いに行く途中、カマキリに食べられ、カマキリはムクドリに食べられ、ムクドリはヤマネコに食べられというように次々と食べられていきます。食べられるたびに、「ばかあ、ばかあ」「とんちきめ」「わるもの」とみんな悪口をわめきます。その悪口のやり取りがおかしくて、大笑いします。その一方、ありこが食べられたのが嫌だったという中学部の女子生徒もいました。

4 人の一生を描いた昔話

昔話と聞くと、子供っぽいというイメージを持つかもしれませんが、実は人生の真実を象徴的な形で伝えています。特に、主人公の出生から始まり、その成長、課題を果たして、結婚や宝物を得て、「め

でたしめでたし」で終わる本格的な昔話は、小学部の高学年から中学部の児童・生徒たちを引きつける力があります。主人公に寄り添って、冒険を真剣に受け止めています。一つの昔話を聞き終えた子供たちの顔を見ると、遠くへ旅をしてきたという茫然とした表情が見られることもあります。

昔話は、元来、読むよりも、人の声を通して聞いてこそ、楽しさが増します。文字で読むより、耳から聞いた方が深くて豊かな体験ができるのです。長い話だから聞けないのではとためらわずに、挑戦してみてください。

子供たちが喜んだお話としては、日本の昔話では、母親の病気を治すために３人の兄弟がヤマナシを取りに出かける『やまなしもぎ』、クリ拾いにでかけた小僧さんがやまんばに捕まって、追いかけられる『三枚のお札』、外国のお話としては、カラスにされた７人の兄さんたちを探しに妹が遠く旅にでかける『七羽のカラス』、豆から生まれたまめたろうが、悪い王さまを退治する『まめたろう』などがあります。『赤鬼エティン』や『クルミわりのケイト』『月になった金の娘』などの深い味わいを持つお話もしっかりと聞きます。

『ねむりひめ』では、王子がねむりひめにキスをする最後の場面にわっと声をあげ、顔をおおって、恥ずかしがったり喜んだりしている女子生徒もいて、自分のこととしてお話を聞いていることがわかります。

5 プログラムの立て方

お話を聞いた経験やお話への興味が様々なので、幅広い年齢に応じたプログラムをたてるとよいでしょう。昔話の方が創作物語より大勢の子供に受け入れられるので、昔話を中心にし、創作は１話程度にとどめます。唱え言葉や歌の入った話、小さい人向きの話、ユーモラスな話、年齢の高い生徒が満足できる本格昔話、日本の話、外国の話など、バラエティに富むように工夫します。

お話の間に、わらべ歌や詩の暗唱を組み込むのも気分転換になります。重複障害の子供の中には、わらべ歌にだけ反応を見せ、いつまでも一人で歌っていることもありました。

輪唱で歌うと楽しい歌に「あめこんこん　ゆきこんこん」や「ほたるこい」があります。手遊びをして楽しめる歌には「ぎっちょ　ぎっちょ　こめつけ　こめつけ」（➡p 54）や「なかなかほい」「ちゃちゃつぼちゃつぼ」などがあります。手遊びは簡単に説明できて、誰でもできるような単純で、リズムを楽しむ遊びが喜ばれます。

『かぞえうたのほん』（➡p 9）を使って、面白い数え方を唱えて、大笑いしたこともあります。北原白秋の「五十音」を読んだときには、読み手に続いて、子供たちも声を張り上げて唱え、気持ちを発散することができました。

6 子供たちに喜ばれたお話

1　小さい子から楽しめるお話

〈昔話〉

『三びきのやぎのがらがらどん』　アスビョルンセンとモーの北欧民話　せたていじ やく　福音館書店

「三びきの子ブタ」　石井桃子 編訳 『イギリスとアイルランドの昔話』 福音館書店

「ねずみのすもう」　瀬田貞二 文 『日本のむかしばなし』 のら書店

「ミアッカどん」　石井桃子 編訳 『イギリスとアイルランドの昔話』 福音館書店

〈創作〉
『**ありこのおつかい**』　石井桃子 さく　中川宗弥 え　福音館書店
「**あなのはなし**」　ミラン・マラリーク　作　間崎ルリ子 訳　『愛蔵版おはなしのろうそく２』
東京子ども図書館
「**小さな赤いセーター**」　リリアン・マックリー 作　石川晴子 訳　『愛蔵版おはなしのろうそく４』
東京子ども図書館

2　言葉や音の響きを楽しむお話

「**おばあさんとブタ**」　松岡享子 訳　『愛蔵版おはなしのろうそく４』　東京子ども図書館
「**かにかに、こそこそ**」　笠原政雄 語り　『愛蔵版おはなしのろうそく９』　東京子ども図書館
「**金色とさかのオンドリ**」　勝田昌二 訳　『愛蔵版おはなしのろうそく２』　東京子ども図書館
「**ついでにペロリ**」　松岡享子 訳『愛蔵版おはなしのろうそく３』　東京子ども図書館
「**鳥呑爺**」　稲田浩二、稲田和子 編著　『日本昔話百選』　三省堂
「**ホットケーキ**」　松岡享子 訳　『愛蔵版おはなしのろうそく９』　東京子ども図書館
「**やぎとライオン**」　内田莉莎子 著　『こども世界の民話　上』　実業之日本社

3　ユーモラスなお話

〈昔話〉
「**アナンシと五**」　内田莉莎子 著　『こども世界の民話　下』　実業之日本社
「**おいしいおかゆ**」　佐々梨代子、野村泫 訳　『子どもに語るグリムの昔話　１』こぐま社
「**地獄からもどった男**」　稲田和子、筒井悦子 著　『子どもに語る日本の昔話　１』　こぐま社
「**なまくらトック**」　松岡享子 訳　『愛蔵版おはなしのろうそく　２』　東京子ども図書館
『**ふしぎなたいこ**』　石井桃子 文　清水崑 絵　岩波書店

〈創作〉
「**あくびが出るほどおもしろい話**」　松岡享子 作　『愛蔵版おはなしのろうそく　３』　東京子ども図書館
「**エパミナンダス**」　S・C・ブライアント 作　松岡享子 訳　『愛蔵版おはなしのろうそく　１』
東京子ども図書館

4　本格昔話

「**海の水はなぜからい**」　以東悦子 訳　『おはなしのろうそく　23』　東京子ども図書館
「**かえるの王さま**」　佐々梨代子、野村泫 訳　『子どもに語るグリムの昔話　２』　こぐま社
『**かさじぞう**』　瀬田貞二 再話　赤羽末吉 画　福音館書店
「**かしこいモリー**」　松岡享子 訳　『愛蔵版おはなしのろうそく　１』　東京子ども図書館
「**小石投げの名人タオ・カム**」　サン・スウンソム 再話　松岡享子 訳
『子どもに語るアジアの昔話　２』　こぐま社
「**腰折れすずめ**」　稲田和子 再話　『愛蔵版おはなしのろうそく８』　東京子ども図書館
「**五分次郎**」　稲田和子、筒井悦子 著　『子どもに語る日本の昔話　３』　こぐま社
「**七羽のカラス**」　佐々梨代子、野村泫 訳　『愛蔵版おはなしのろうそく　５』　東京子ども図書館
「**月になった金の娘**」　八百板洋子 編訳　『吸血鬼の花よめ』　福音館書店
「**百姓のおかみさんとトラ**」　イクラム・チュタイ 再話　松岡享子 訳　『子どもに語るアジアの昔話　２』
こぐま社
『**ねむりひめ**』　グリム 原著　フェリクス・ホフマン え　せたていじ やく　訳　福音館書店

「ブレーメンの音楽隊」　佐々梨代子、野村泫 訳 『子どもに語るグリムの昔話　4』 こぐま社
「マメ子と魔もの」　内田莉莎子 著 『こども世界の民話　上』 実業之日本社
「まめたろう」　小林いづみ 訳 『愛蔵版おはなしのろうそく　10』 東京子ども図書館
「屋根がチーズでできた家」　福井信子、湯沢朱実 編訳 『子どもに語る北欧の昔話』 こぐま社
『**やまなしもぎ**』　平野直 再話　太田大八 画　福音館書店
『**やまんばのにしき**』　まつたにみよこ ぶん　せがわやすお え　ポプラ社

V　新しいメディア － マルチメディアＤＡＩＳＹ

印刷物の形態で読書をすることが困難な人々を支援するために、マルチメディアDAISYがあります。マルチメディアDAISYには、主に次のような機能があります。

- テキストデータと画像の表示、音声の出力を同時に行います。
- 目次からテキストデータ内の好きな場所に飛べる機能があります。
- 読み上げの音声には、音訳者が読むの場合と音声合成エンジンで読み上げるものがあります。
- 再生するときには、文字の大きさ、カラーコントラストの調整、読み上げの有無、読み上げのスピードの調整ができます。
- 読んでいる箇所をハイライトすることができます。

マルチメディアDAISYは、再生用のソフトウェアを使用して、パソコンやiPad（voice　of daisyソフトをインストールさせて）で再生することができます。活字を読むことが困難な子供は読み上げ音声を聞いたり、ハイライト表示によって、どこを読んでいるのかわかるようにして、お話を楽しむこともできます。現在、子供の読書にマルチメディアDAISYを活用している都内の特別支援学校もあります。

都立多摩図書館では、マルチメディアDAISYの収集を始めています。興味のある学校関係者の方は御連絡ください。館内で御覧になることができます。また、学校への貸出をすることもできます。

マルチメディア DAISY 図書
『三匹の子ぶた』
ジョーセフ・ジェーコブス　作　画工舎　絵
森口瑤子　朗読
（財）日本障害者リハビリテーション協会　製作

東京都立多摩図書館児童青少年資料係では、子供の本や読書についての御質問、
御相談を受け付けています。
いつでも気軽に御利用ください。

東京都立多摩図書館

電話 **042 − 524 − 6428** (児童青少年資料係ダイヤルイン)

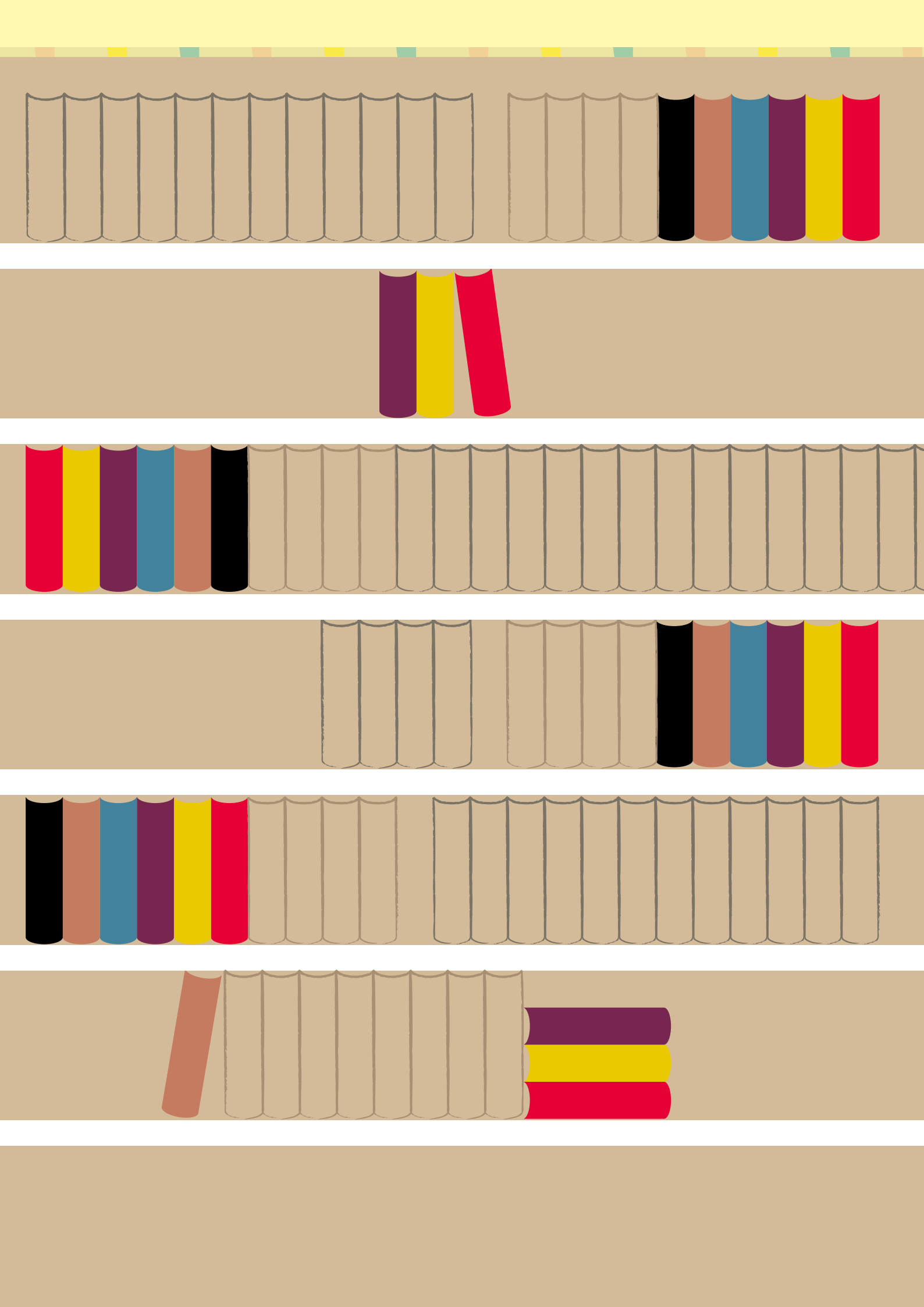
都立図書館・学校支援シリーズ

特別支援学校での読み聞かせ　都立多摩図書館の実践から

平成 25 年 4 月 20 日発行

執筆・発行　東京都立多摩図書館

〒 190 − 8543　立川市錦町 6 − 3 − 1

電　話　042 − 524 − 6428

ファクシミリ　042 − 525 − 9168